

「巻き込まれ親父の邂逅」

作 藤次郎政秀

● プロローグ、エージェント稼業とは

この世界でエージェント派遣会社と、一言で言っても、その仕事は多種多様で：エンジニア、講師、コンサルタント等のある特定の専門知識や技術を持つ人材を雇用または自身を依頼された企業・組織に派遣する企業・組織・個人を指す。そういう意味で言えば、芸能事務所も所属タレントをマスメディアの企画する媒体に出すのもエージェント稼業である。

その中で、警護・護衛（ボディガード）、探偵、警察・検察の支援、消防団や自警団またはその支援、政府・市区町村や町会の支援、猟友会の支援、軍隊・民兵会社の後方支援や傭兵の派遣、はたまた任侠集団の手伝い（笑）…と言う様な仕事に特化して言えば、”特別銃器携帯・使用許可証”を所持している人物が経営に関わっているか、または雇用しているか、そのエージェント派遣会社への依頼内容と報酬が大きく異なる。

すなわち、銃器を使用する機会が多い業種である。それを日常に持ち歩いて仕事ができるかどうかである。

H Gの経営するエージェント会社の碇屋は、その業界の仕事をしている。

この類のエージェント会社の規模は皆小さく、また地元密着型が多いので、競合と言うのは、請け負っている顧客に左右される。

碇屋の主要顧客と請け負う仕事は、皇王家と貴族（OT殿下、B侯爵等）や芸能事務所〇×エージェンシー、民間企業や個人依頼等の護衛・警護任務。Y国際港商店街の自警団任務。Y国際港駅前消防団支援任務。港町警察署・港町水上警察署・B県領地機動隊とBSAT、Y市銃砲試験場、Y市役所鳥獣駆除係と猟友会、港町シューティングセンター…あと非公式に任侠集団葛葉組等の銃器の整備請負（ガンスミス）や銃器扱いならびに射撃のインストラクターの派遣等を主に行っている。

碇屋のあるY国際港の町は、かなり古い時代から存在し、昔から海外マフィアと地元任侠集団との争いが絶えず、またその上前を撥ねようとする輩が多い。

●任侠集団葛葉組

HGは商店街会長のDAから呼ばれ、商店街の一本裏道にある『葛葉組（くずのは組）』の看板が掛かっている立派な門を潜る。

邸内の事務所に通されたHGは、DAに勧められるまま応接セットのソファーにかけろ。

「よう、HGよく来た」

「親父さんも、お元気そうで…」

「それがなあ…お前…もう知っていると思うが、最近縄張り内での争い事が多くてな」

「はあ」

HGはこのところ、白山亭がある商店街近辺で喧嘩などの事件が続発しており、港町警察署が巡回を強化しているのを、港町警察署長（DAとHGの親戚）から聞いていて、地元自警団としても協力を依頼されていた。

「ひい婆さんの時代から、ウチと（葛葉組、地元任侠集団）とあちら（地元C国マフィア）は、お互い干渉しないって密約があったんだが、最近その禁を破ってウチのシマでトラブルおこしやがって、そろそろこちらも我慢の限界だ」

「はい（…親父さんかなり頭に來ているな）」

「そこでだ、お前にも手伝ってもらおう」

「手伝うって？」

「そりゃ本格的にやりやったら、人手がいるからな！そんな時は、加勢を頼む」

「はあ…（白山亭や母屋の改修費借りてるから、あからさまに拒否する事はできないな…どうしよう）」

とHGは返事をして、

「相手は、本当に地元の（C国マフィア）連中ですか？他の勢力が入り込んでいると言う事はないので？」

とHGが訊ねると、DAは上を向いて、

「うーん、それを言われるとな…相手のツラア見た手下の話では、この辺では見ないツラで、C国語の様な言葉を話すと言う事だけだが…確かに地元の奴らだとフツ―に皇国語話すが…」

「他には？」

「そーいえば、なんか内部で揉めているのも聞いたことあるな…あと、聞いた事無い言葉しやべる奴とか…」

「…内部抗争ですかね？（C国語以外の言葉かな？葛葉組の人なら、C国語と他国語の聞き分け位はできそうだけど）」

「それもあって、昔の密約を知らん連中が悪さしているのかもなあ…」

と言って、DAは腕を組んだ。それを見てHGは（…親父さんも子分をやられて頭に来ているのは解るが、冷静に考えられるようになって来たかな？）と考え、

「その辺、もっと詳しく知りたいですね」

「そうだな…向こうの棟梁（マフィアのトップの事）と話をしてみるか…」

「そうですね、なにか分かったら教えて下さい（まずは、穏便に…）。それから、銃器のメンテナンスが必要なら早めにウチ（碓屋ガンスミス）に出してくださいね」

「…この野郎！ちやっかりしてるなあ…（笑）」

「それで、決着つかなくなつて、出入り（本格抗争）になったら、ウチのエージェントを派遣しますよ」

「そうならない事を願いたいねえ、お前の弟子の娘達に怪我させたくないなあ…可愛

いし」

「ありがとうございます。そうならないようにしてください。白山亭（碓屋）はどっかの秘密戦隊とか、悪の秘密結社と対等に戦える改造人間が居る店じゃありませんので…」

「おもしれーこと言うなHG！その特撮、昔僕も見てたよ」

● B 侯爵秘書との邂逅

HGはB侯爵秘書から連絡を受け、帝都の高級レストランに呼びつけられた。

帝都のレストランに出かける前、バーカウンターに居るTTに

「出かけてくる」

「お帰りは？」

「多分遅くなる」

「いずこへ？」

「帝都ロイヤルホテルのレストラン」

「どなたかと、ご会食ですか？」

「B侯爵秘書に呼び出された」

「エエッ？もしかして…B侯爵様とIY（IYの父親はB侯爵）の事ですか？」

と驚いて言うTTにHGは顔をしかめて

「…だったら、侯爵様邸に呼びだされるか、ここに押しかけてくるかだろう…」

と言うと、TTはハタと

「そうですね…もしかしたら、D国エージェント機関DSFか、国家公安局の事ですか？」

「…かもしれん。とにかく来いと言うので行ってみる」

と言って、白山亭を出ると、HGは車の置いてある運河を渡った駐車場に向かわずに、Y国際港駅に向かって歩いて行った。TTは（車で行かないと言う事は、お酒が入るのね）と女

のカンが働き（多分変な方向です（笑）作者）、スマートフォンでKMに

「社長が帝都の高級レストランでB侯爵秘書とデートだそうです！」

と言うと、KMが笑って、

『TTこっそりついて行っていいよ、IY連れて…代金は経費で落とすから』

と言われたので、TTはフロアに居るIYを呼んで、事の次第を話し、二人で出かける事にした。

その際に、TTは母屋に居るHYに

『准尉がデートに出かけたので、私とIYが追跡するから、フロアスタッフ交代して』

と白山亭店内のフロアスタッフの交代をお願いしたら、HYが慌てて店内に飛び込んでき
て、

「なんでよ？TTが准尉のデートを監視しに行くのに、わたしが留守番しないといけないのよ！わたしも行く！」

と、TTに食って掛かった。TTは困ってしまい、

「だって、お店空にするわけじゃないじゃないの！私とIYが行くのは、KMさんに許可貰ったからよ」

「だったら、あなたとIYのフロアスタッフ二人も行かなくていいじゃないの！」

と、憤慨する。

…白山亭でコーヒーを淹れる事が出来る人がバーカウンターでフロアスタッフをします。

現時点では、HG・TT・HY・IYの4人です。作者

「主（HG）の留守を守るのは、妻の務めですよ。姉さん」

とIYが有めるように言うと、HYは怒って、

「都合の良い時だけ、そう言う事言わない！」

「あー、もう！時間がないからあー」

と言って、焦っているT TにH Yは

「だから、なんでコーヒー淹れる事の出来るフロアスタッフが二人も出かけるの！」

と言うと、I Yが

「私が行くのは、准尉の相手が実家の秘書ですので！」

と自分が行く正当性を勝手に主張し始めた。H Yは（えー、親父のデートの相手って、あの冷たいB侯爵秘書なの？）と驚いた。

「なんで、また…あんな女と…そのデートなんて？」

H Yは混乱して言うと、

「だから、見に行くのよ！」

とT Tが言うと、I Yが

「では、ジャンケンで！」

と勢いで言うと、H Yもそれに乗り、

「恨みっこなし！」

「『ジャンケン…』」

帝都ロイヤルホテル…

H Gは帝都ロイヤルホテルのレストランの入り口に着き、応対したフロアスタッフにB侯爵秘書の事を告げると、

「H G様でいらっしゃいますね。お連れ様は既に参られております。ご案内します」

と言って、窓際の席に案内された。そこには、B侯爵秘書が座っていた。

「…どうも、お待たせしました。本日はお招きいただきありがとうございます」

「お待ちしていましたわ。H G社長…お座りになって」

と、いつものフォックスグラスの眼鏡ではなく、オーバルグラスの眼鏡にフォーマールドレス

姿のB侯爵秘書は、向かいの席を手で示した。HGは「では…」と言って座ると。

「HG社長、ご退院おめでとうございます」

と言われ、HGは驚いた。

「ありがとうございます…でもどこから私が入院（「巻き込まれ親父の厄災」参照）していたと言う事を知りましたか？」

「オホホ、Yお嬢様ではないことは確かですよ。Yお嬢様はまだ私を避けていますから…」

HGは（だとするとIS辺りか…）と思ったが、それ以上は詮索しないことにした。それからいきなりこの席で呼び出された要件については切り出すのも野暮な事と思い、会食の流れに任せることにした。

「ワインはいいかでしょうか？」

とソムリエがテーブルに来る。HGが何を選ぶか試すような目で見るB侯爵秘書。HGはソムリエと会話しながらD国のワインを選ぶ。

「畏まりました」

とソムリエがワインをグラスに注ぐと、HGはグラスを持ちテイスティングをする。HGが「このワインでいいです」と答えると、「お連れ様はいかがでしたでしょうか？」とB侯爵秘書に聞く。「…では、私も…」と控えめに答える。B侯爵秘書のグラスにもHGが選んだワインが注がれる。

ソムリエが去った後、HGとB侯爵秘書は乾杯した。

「B侯爵秘書さん…」

「「TK」とお呼びください。そんなに警戒しないで…今日はB侯爵秘書の立場でなく、私一人としてHGさん個人とお話したくてお呼びしましたのよ…もちろん、D国エージェント機関DSFの事も皇国国家公安局の事もここでは抜きにいたします。ご安心ください」

それを聞いてHGは

「すっかり、私の懸念を取り払って下さり、ありがとうございます…ではTKさん」

「はい」

「IYから聞きましたが、TKさんはD国の帰国子女と聞いておりますが」

「はい、D国にある皇国大使館に勤務していた外交官の娘です(笑)。在皇D国大使館の大使夫人とは幼馴染ですの…オホホ」

「…成程、だから今でもD国大使館から依頼とか来るのですね」

「はい、そうです。ですから、HGさんはD国のワインを選びましたのね」

と言つて、ワイングラスを持ったTKは微笑んだ。

コース料理が運ばれる。D国の話から始まり、TKとIYの昔話とか、白山亭や碓屋での

IYの話とか、B侯爵家の話とかで会話が進む。その途中でふとTKが

「私は、昔あなたに危ないところを助けていただきました…Z県領地のO島での事覚えていますか？」

と切り出した。

「…昔？皇国政府軍時代に任務でO島に行ったことはありませんが…」

「あの時、私はあなたの乗っていた対戦車砲を乗せた装輪装甲車(正式には、HG達が試験していた駆逐装輪車と言う名称です。作者注)に乗せていただいたのです」

「…!あの時の体調不良の？」

HGはO島での事を思い出した。TKはHGの言葉に微笑み、

「覚えていましたか…あの時あなたの装輪装甲車に乗せていただければ私は死んでいたかもしれません…あの時私は特異な子宮外妊娠とは知らずに任務についていたので…生死に関わるとの事で後方に送られず、補給基地の野戦病院で緊急手術を受け、子宮ごと子供

を摘出されてしまいました…」

T Kの告白にH Gは驚き、言葉を失った。

「でも、あの状態ではいずれ…町の病院でもそうになっていた事でしょう…逆に野戦病院の医師の腕が良くて助かりました。子宮と子供を失ったことにより、当時交際していた彼とも別れました。もう望んでも子供が授からない身…Yお嬢様やKお嬢様が私の子供だったらいいのにとふと思います」

「…さぞかし辛いことだと思います…またお二人のお嬢様に対するその思い、いつか届きますよ」

「でも、Yお嬢様とKお嬢様には内緒にしてくださいね」

「…なぜでしょう？」

「それは、私の勝手な思い込みでお二人を煩わせたくありませんから」

「…そうですか」

「私が今のあなたの事を知ったのは、Yお嬢様の事で侯爵様から調べる様に言いつけられた時です。あなたの前歴について調べさせていただきました。その途中でいくつかの機密事項に突きあたったので、皇国国家公安局のI S様のお力もお借りしました…その結果、あなたが私の命の恩人ではないかと思いました」

「私は、軍時代に機密事項の兵器類を扱っていましたから…それにF県領地の事件は、ある意味軍組織の恥に値しますしね」

「その事を侯爵様に報告しましたら、侯爵様が大変興味を持たれ、『私が直接、彼と話をしたい』とおっしゃいました。それで、侯爵様に従い、白山亭であなたにお会いした時、やはりH G社長、あなたが私の命の恩人である…本人と確証しました…」

「そうですか…」

「ですので、私は以後、侯爵様の意思とは関係なく、あなたとYお嬢様に対する援助をする

事にしたのです」

「…それで、M PやS BさんやM Zさんの時も…」〔巻き込まれ親父の困惑〕参照」

「そうですね…でも、S B様に関しましては、国際問題も絡みましたから、侯爵様が動きま
したわ…オホホ」

「ありがとうございます」

と言って、H Gは頭を下げると、

「…実は、O島の戦場で、私もあなたが居た分隊の方々に助けられたんですよ」

「本当ですか？」

「はい、おかげさまで運転手の親友は足を負傷して失血死するのを分隊の衛生兵の方の応
急処置をして頂き、補給基地に撤退する際にも援護してくれたので、短時間で基地に戻って
手当てができました。そのおかげで、足を切り落とさずに済み、今でも私と一緒にガンスミ
スの仕事をして、家の縁側でタバコを吸いながら、軽口を叩きあっています」

H Gの話聞いて、T Kはしみじみと

「…なにかのご縁ですかねえ…」

「そうですね」

H GがT Kと楽しそうに会話をしているのを、遠くから見ていたT TとI Y。T Tは嫉妬
し、I Yは複雑な心境になった。

会食を終え、ホテルのエントランスでT Kはタクシーに乗り込み

「今夜は、私の思いを伝える事が出来ました。それでは、ごきげんよう…また会いましょう」
と言って、T Kはレストランを後にした。それを見送ったH G。自分は電車で帰る気なので、

駅に向かおうとしたところ、目の前に居るT TとI Yを見て

「…TT…それにIY…何しに来た！」

と言って、驚いた。

「准尉いゝ！浮気はダメですよ！私という者が居ながらあ」

こめかみに浮き出た血管がピクピクさせながら笑っていない不気味な笑顔のTTにTKの事で詰め寄られる。HGはまたTTが自分をからかおうとしていると思い、

「…なに言ってる？お前さんは旦那さんと子供がいるだろ？」

と言り返すと、

「そうではありません！！人が真剣に話しているのに、あなたって人は…！すぐはぐらかす！」

珍しく真剣に怒っているTTにHGは意味が分からず、ただたじろぐ。

「娘達も成長してきているのに、こんなところで逢引きなんて…」

TTの言葉を聞いて

「？？（なんか勘違いされてる…俺）」

「准尉！私達の事に飽きちゃったんですか？」

IYが涙目になってHGに訴える。（こっちは演技です。作者(笑)）

「コラコラ…IYお前まで何言ってる！」

と言って、HGは慌てる。傍から見ると、浮気現場を妻と娘に抑えられた夫の様な修羅場に見える。

HGは深呼吸をして（まずは、各個撃破…）と考え、

「あの席では、TK…いや、B侯爵秘書とIYがB侯爵家に居た頃の話をしてもらった…お前、高校時代から組手（こちらの世界でいう空手のようなもの）やってたんだな。それで…今の仕事に生かしているんだね。あと、B侯爵邸内でのあんなことやこんな事も…」

「やめてください」

と言って、I Yが恥ずかしがると（これで、I Yはあっさり撃破…次はT Tの誤解をどう晴らそう…）と思いながら、

「T T」

「はい、何でしょう？」

T Tは腕を組んで、ハッキリH Gに警戒の意思を示していた。

「…なんで、F子ちゃん（I F、H Gの元カノ？）の時もそうだったが、俺がよその女性と仲良くするとそんなに嫉妬する？…俺に惚れてる？」

「そうです。何か！」

T Tはハッキリ言つて、意固地になる。H Gは（しまった！…開き直りやがった…これでは旦那、子供を出しても機嫌は直らんなあ…さて）と考えて、

「T T、お前さんが俺を惚れてくれるのは感謝している。また娘どもについて心配してくれるのは感謝している」

「…なら、どうして…あなたの娘達のお姉さん役を私に課したのは准尉、あなたですよ」

「でも、なんでB侯爵秘書と会ったくらいで思考が変な方向に向くかね？出かけるときにビジネスの話になると思わなかったかい？」

「…」

「もしかしたら、D国エージェント機関D S Fか、国家公安局の事と思って心配してきてくれたのなら感謝するよ」

その言葉にT Tはハツとして

「スママセン…でも、なにか准尉が遠くに行きそうな気がして…」

T Tが急にしおらしく言う。

「…遠く？まあ、この前は本当にあの世に行きそうになったが…（「巻き込まれ親父の厄災」

参照)」

「…ごめんなさい、准尉…」

と言って、T Tは泣き出した。H Gは訳も分からず、

「これで涙を拭け」

「はい」

H Gがいつものスラックスのポケットとは違う場所から真新しいハンカチを差し出した。それをT Tは受け取り、涙をぬぐった。それを見たI Y…

「准尉？」

「なんだ？」

「准尉はハンカチを複数持ち歩いているのですか？」

「そうだ」

「なんのために？」

「こういう場合に使うためだ」

「…成程、准尉は紳士で女たらしですね」

「なんだと！」

「ホント！そうですね」

T Tも言う

「…こんなにモテて居るのに、なんで結婚できなかったんだろう…」

と言って、H Gがしよげると、T TとI Yが笑った。

「ハハハ」

「笑うな！」

● M Z襲来

「いらつしやいませ…ゲツMZさん…」

『ゲツ』は、余計でなくて？HG社長いらつしやいます？…それからAM様はあ？（こころ）だけ、下心丸出し」

バーカウンターでカップを磨きながら、女給とMZのやり取りを見て（あいつ（AM）”様”付けかよ…えらいもんに懐かれたなあ…お可哀想に…）と、HGの脳裏には、秋田犬（AM）に詰め寄るシェパード犬（MZ）を思い浮かべた。

それと入れ違うようにそそくさと会計を済ませて出て行く人物がいた。

HGはそれを横目で見て、

「ご注文は？」

と、メニューも出さずにMZに言うのと、

「いつもの白山亭ブレンドコーヒーをお願いしますわ」

「畏まりました」

とHGが言うと、MZは店内に居たMPを見つけて、

「ハアイ！MP」

と陽気に手を上げた。それを見たMPはズカズカとバーカウンター席に来て、

「また、何しにキタ？押し売りか？」

「…あらあ…相変わらずお客様に対してなんて態度を取るの？まったく…お店の躰がなっていないわねえ…ねえ、HG社長？」

と、MZが高飛車に言う。それを訝しげに見ながらも、

「私の躰が至らないばかりに…お客様に度々ご迷惑をおかけしまして、申し訳ありません」と言つて、HGが頭を下げると、MZは驚き、

「あらあ…それでは、私がカスハラしている事になってしまいますわあ」

MZはバーカウンターの上に肘をつき、両手を合わせてそれを横に倒して顎を乗せて上

目遣いでH Gに言った。

カチンときたH Gは、わざとらしく

「あつ、A Mおかえりー」

と言うと、M Zは慌てて入り口を見ながら

「えっ？ A M様帰ってらしたの…どこどこ？」

と言ったので、H Gは（ざまーみろ）と思い、

「な～んちゃって…」

と言って、H Gが舌を出すと、M Zは途端にむくれた。

「A M、今H Yと畳の上で汗流してるネ」

M Zの後ろに居るM PがM Zに追い打ちをかける。

「エ、エッー、A M様とH Yってそんな関係？」

M Pの言葉に、とんでもない勘違いをしているM Zを見て、H Gは（ナイスM P！）と親指を立てる。

「…とは言っても、港町警察署の道場ネ」

と直ぐに種明かしをするM Pに

「な～んだあ…」

と言って、安堵するM ZにH Gは（M P…お前…減給！）と思って、立てた親指を下に向けた。

H GとM Pの立て続け冗談攻撃の連携に

「なんだか、凄い虚脱感…」

M Zはため息をついて、出されたコーヒーを一口飲むと、真剣な顔つきになり、

「ところで、H G社長、私と入れ違いに出て行った女ご存じ？」

「？（さっきの女性か…）」

「あの女、〃RS〃と言ってC国の国家調査局員ですよ」

と言うMZにHGはわざとらしく、

「ほー、知らなかった(…なんか聞いた事ある名前だなあ…でも、R姓はC国に多いし…)」

「あらあ…本当ですか？」

MZがHGの態度に疑問を持つて聞き返した。HGはそんなMZに

「最近、ここらで地元任侠集団とC国マフィアが揉めているとは聞いているが…その関係かな？でも、なんでそいつの事知ってる？」

…本来、こういう話題は避けるべきでしょうが、相手がD国大使館付エージェントのMZなので、平然と話しています。作者。

「それは…在皇国大使館員同士…日夜駆け引きに明け暮れますのよ…まあ、私の事を見て尻尾を巻いて逃げ出したところを見ると、あちらもここには、たまたま休憩か何かで来た程度でしょう…ここに私が来て店員に名前が知られている事を知ったので、当分ここには姿を見せませんわあ…オーホホホ！」

MZは澄ました顔で言った。

「逆に、MPは知らなかったのか？」

とHGがMPに訊ねると

「シランかったネ！」

「…だからあなたは〃脳みそ筋肉女〃と呼ばれるのよ！」

とのMZの悪口に、MPは顔を真っ赤にして怒った。

「ムキッ！」

MPとMZのやり取りを見ながら、HGは(ウチも、グローバルになったものだ…もつと

もここ（Y国際港）ならでは、と言う事もあるが…」と思った。

●RS

翌日、白山亭店内…

「あのオンナまたきてるネ」

「ホントだ」

白山亭の窓際のカウンター席に座っているRSをMPが見つけ、バーカウンターに居るHGに言った。

「MZの言葉、嘘だったネ。あいつのツラ、魔除けにもなかったネ」

「うまいことを言う…」

MPの比喩にHGは笑って答えた。

バーカウンターでHGとMPが窓際のカウンター席に座るRSを見ていた。HGはふと、MPの肩を叩き、

「（MP…チョット）」

「？」

「（奴（RS）を撮影するから、ちょっと協力してくれ）」

と小声でMPに指示をする。

「（ハイネ）」

「もう少し、右に…おっと行き過ぎ…そこでストップして何かポーズをして…いいねえ」
と言って、MPをモデルにしてHGはスマートフォンで撮影する振りをして、RSの姿を写した。

HGはRSの画像を確認しながら、（RRに見せてみるか…C国の国家調査局員なら、知っているかも）と考えた。

その後、T Tと交代したH Gは、Y国際港商店街のメインストリートの裏道の商店街にあるC国雑貨商“R交易商公社”を訪れていた。

R交易商公社は、C国特産品の食材・薬材・酒・タバコ・雑貨類の他にコーヒー・紅茶、スパイス等手広く扱う商社である。この会社の創業者とH Gの曾祖母とは付き合いがあり、そのため、この店の現社長のR RとH Gは子供の頃から親交がある。H Gの父親がH Gだけ（H Gの兄は母親同様、白山亭の霊達を怖がった）を連れて、度々白山亭を訪れた時や、H Gが幼い頃に、母親が入院して白山亭の祖父母に預けられていた際の遊び友達であった。ちなみに、白山亭のオリジナルコーヒーのコーヒー豆の配合は、実はこの店の創業者夫婦がH Gの曾祖母と一緒に試行錯誤して決めたモノである。

また、かつて、白山亭に碇屋と言う娼館の裏家業があった様に、R交易商公社にも“金龍公舎”と言う、皇国内でC国物産を扱うための独特の情報網の本部という裏家業がある。またY国際港を縄張りとする地元C国マフィア“緑龍城”とつながりは、H Gが親戚の商店街会長D Aの葛葉組との関係に近い。

H GがR交易商公社の奥にある事務所に入ると、

「いらっしやいH G」

「やあ、R R」

「コーヒー豆の注文かい？」

R RはC国特産のお茶を淹れて、H Gに勧めながら言うと、H Gは真剣な表情で、
「それもあるし、聞きたい事もある」

「地元C国マフィアの事かい？」

とR Rが直ぐに答えた。それを聞いてH Gは（やはり、知っているか）と思って。

「そうなんだ」

とH Gが言うと、R Rは

「お互い、初代（白山亭創業者のH Gの曾祖母とR 交易商公社創業者のR Rの曾祖父母）からの密約だからなあ…葛葉組（地元任侠集団）と緑龍城（地元C 国マフィア）は、お互い干渉しないってえのは…でも、今回街で暴れているのはあいつら（緑龍城）じゃないよ」

「？」

「まあ、見た目は分かんないだろうけどね…今街で暴れているのは、『青虎舎』と言って、C 国反政府組織崩れの連中…」

「そうなんだ！」

「だから、遠慮しないで叩いていいよ。その方がウチとしてもありがたい」

「おいおい、まるで他人事だな」

「『笑裏藏刀』！」

とR Rが言うと、H Gは一瞬考えて、

「友好の態度を示し、敵の警戒心を解いてから、隠し持った刀で相手を撃つだけ？」

「はい、よくできました」

R Rがニンマリとして言うと、H Gは不思議に思っ

「それがなに…あつ、それでそっち（C 国側のR R）は手出ししないで、こっち（皇国側のH G）に叩かせるんだ…俺は刀の役かよ！」

とH Gは気付き、次に呆れて言うと、

「そう…青虎舎の連中もウチにとっては大事な同胞であり、お客様。でも必要な情報は提供するよ」

「じゃ、青虎舎のアジト教えて」

「それはダメ」

「いゝじゃん」

「そっちで探しな…ヒントは『丘の上の雲』」

「じゃ、緑龍城は？」

「今、こちらで抑えてる…もつとも、青虎舎の襲撃を受けて満身創痍だけど…」

とRRが口を濁すと、

「おとーさん、ただいま」

店の入り口から女性が入って来た。歳はIA位か…女性はHG達が居る事務所の脇を通り、奥の住居に入っていた。それを見たHGは（さつき店に居た娘だな…RSとか言ったわけ？…C国の国家調査局員とMZは言っていたが、RRの関係者か？…あれ？『S』って名前、聞いたことある様な…）と思い、

「誰？」

HGが訊ねると、

「覚えてない？ウチの娘だよ…C国の大学に留学して、あっちの商社に就職して、つい最近こっちの勤務になったそうで、よく帰ってくるんだ」

とRRが言くと、HGは思い出した様に、

「RRの娘って、Sちゃんしか知らないけど（…そういや、RRの娘にSと言うのが居るけど…Sの他にもC国に姉が居るとは聞いたことがあったな）」

と言うと、RRは呆れたように、

「そのSだよ！」

「えっ？あの小太りの娘があんなに可愛くなったの？」

と言って、HGが驚いた。

「小太りで悪かったね！」

と言って、不意にRRの後ろから顔を出すと、素早くHG達の茶菓子をくすねる。

「コラっ！S！！」

「可愛くなくても、お菓子をつまみ食いする手癖の悪さは変わらんか…」

と言って、HGは笑う。

「そうかそうか、Sちゃんか…最近ウチの店によく来るよね。ウチによく来る口の悪いパツキンの常連(MZ)が言うには…」

とHGが言いかけると、RSはRRの肩越しに口に指を当てていた。HGは(やはり、C国の国家調査局員か…RRのR交易商公社と金龍公舎は違うのか…)と思い、軽く頷くと

「ウチのコーヒーのレシピを盗みに来た外国商社の人に似ていると言ってたが…当のパツキンも同じだと俺は思ってる」

とHGが言うと、RRはRSに向かって、

「S、そんなことしても無駄だぞ」

「なんで？」

「白山亭ブレンドコーヒーの配合は、ここに居るHGよりも俺の方がよく知っているから…」

「はは、その通りだ。聞き出すならおとーさんに聞いた方がいいよ」

「はあい」

と言って、ふて腐れるRSを横に、HGは、

「それはそうと、そっちの喫茶店(R交易商公社の喫茶部“茶癒庵”の事)の様子はどうかい？」

「うーん、相変わらず(客が)入ってないねえ…、裏通りと言う立地がネックかなあ…」

「お茶はいいんだけどね、ウチでここのお茶を“茶癒庵のC国茶”とか“茶癒庵の紅茶”やお菓子をメニュー加えて出していて、コーヒーが苦手なお客さんに好評だけど」

「もっと、そっちにお菓子やお茶を置いてくれないか？」

RRが困った表情をして、HGに縋る様に言うが、HGも困って

「もう…ウチのレジ横満杯だよ。それより、マスコミ呼ばない？碓屋の顧客に芸能事務所があるから、そちらから呼ぶと言うのも…」

「それは勘弁！目立ちたくない」

「そーだよな…だったら、表通りに喫茶部だけ引越したら」

「そーなるよなあ…いい物件あるかね？」

「最近閉店したコーヒーチェーン店って、どう？居ぬきで使えるだろ？」

「あー、あの店か…そうだな」

暫く、H GとR Rは話をして、

「じゃ、コーヒー豆頼むな…あとお菓子も…」

「あいよ、毎度あり」

H GがR 交易商公社の事務所から出ると、

「はあい、H Gおじさん」

「Sちゃん」

「おとーさんに黙っていてくれてありがとうね」

「黙るも何も、R Rにはすべてお見通しだよ」

「えっ、マジ！」

「あそこ（R 交易商公社と金龍公舎）の情報網、なめない方がいいよ。もしかしたら本国（C 国）からR Rに事前に話が行ってるかもしれないよ」

「エッ」

「それより、最近ウチ（白山亭）によく来ているけど、ホントにコーヒーの偵察？豆の配合なら、さっき言ったようにおとーさんの方がよく知ってるよ」

H Gの話に（知ってるくせに！）と思いつつ、R Sは膨れて、

「そーじゃないわよ。しつこいな」

「それじゃ、ウチの女給服着たいとか…」

「…うーん、それはあるけど…今はそれどころじゃないし…」

「じゃ何？」

「さっき、お父さんと青虎舎の事話してたでしょ」

「うん」

「ワタシは上司の命令で、その青虎舎の連中を見張ってたんの」

「そうなんだ」

H Gは（やはり、R SはR R達とは別の指揮系統下にあるのか…）と考えて、

「青虎舎のアジトって知ってる？」

とH Gが言うと、R Sはムキになって、

「今、それを探してるの！ワタシがわざわざ親に身分を隠して実家に帰っているのも、その一つ！おとーさんから、何か聞き出せないかと思ってなの！それに、白山亭って、駅や主要な通り見渡すことができるから便利なのよ。この前はD国エージェントの邪魔が入ったけど、また今度使わせてね」

「コーヒーとか注文してくれればね」

「はい」

と返事をするR Sに（K J君（港町警察署の捜査官）はI Y目的以外にも仕事で使ってるのかな？）とH Gは思った。

「あと、それから…」

と言って、H Gは自分のスマートフォンを取り出した。

「？」

H GはR Sに先程の白山亭店内での画像を見せた。

「な、いつの間に！…それに凄く不細工！」

と驚くR S。画像には、店内で仏頂面して、窓の外を睨んでいるR Sが写っていた。

「まだ、Sちゃんと確信が無かったから、R Rに見て貰おうと撮影した」

「チヨ、肖像権の侵害だわ」

とR Sが膨れると、

「不審者情報だ。この港町商店街の自警団として共有する前に確認するのは当たり前だろ」
とH Gがシレっと言うと、R Sは怒って、

「おじさん消してよ！」

と言うが、H Gは

「消して欲しくば、情報をくれ。嘘ついたら、おかーさん（R L）に転送する（笑）」

とダメ押しの脅迫をした。

「えげつなく、わかったよう」

H Gは白山亭に帰る前に、遠回りして緑龍城の事務所の前を通り過ぎる。

「R Rの話では、青虎舎の襲撃を受けたようだが…」

確かに、いつもなら事務所の前には山積み段ボール箱の横で複数の若い者がタバコを吸っていたり、スマートフォンをいじっていたりして、H Gの姿を見かけると、手を上げて笑いかけてくれたが、山積の段ボール箱はそのまま、人が居ないどころか、人の気配が感じられないほど静まり返っていた。

●とうとう怪我人が出た

白山亭のバーカウンターでコーヒを淹れていたH G…その時H Gのスマートフォンの

着信音が鳴る。相手は葛葉組組長DA…

「はい」

『おっ、HG、今大丈夫か？』

「…すみません、今接客中で…後でかけ直します」

『分かった』

と言つて、通話を切った。

HGが注文のコーヒーを淹れて女給に渡し終わると、電話をかけ直した。

「HGです。先程はすみませんでした」

『はは…白山亭が繁盛している証拠だ、いいってことよ！』

「それで、ご用件とは？」

『ああ…それな…電話だとまずいから、チョットきてくれないか？』

「いいですよ」

『それから…』

「はい？」

『今、ウチ（葛葉組）の周辺に怪しい奴らが居て、どうも見張られてる様なんだ…くれぐれも用心して来てくれないか？』

「そうなんですか？（見張られている…誰に？）それならば…（？）というのはどうでしょう？
ウチ（白山亭）のデリバリーサービスを注文しては？」

『ハハハ、HGお前商売上手になったな！分かった、それじゃ、白山亭オリジナルコーヒーと白山亭サンドウィッチを急ぎ30人前…』

「はい…（頼みすぎだってーの！）」

H Gは注文の品を軽ワゴン車に乗せ、H Yと共に、葛葉組の邸内に入る。

「白山亭です、デリバリーサービスに来ました」

とH Yが言うと、玄関で代貸が出迎える。

「早く入って下せえ…」

H G達は、出前の品を持って事務所に入った。

「よう、H Gよく来た」

H Yに給仕を任せて、H GはD Aと話す。

「ここに来る途中で見ましたが、確かに数人張り込んでいるようですね」

「やはりか…」

「ちよつと、紙とペンを…」

「ほ…」

H Gは渡された紙に通りと葛葉組の敷地の簡単な地図を描き、その通りのいくつかに×印をつける。

「(…)こと…(…)、それからこの辺…」

「…そんなに居るの？」

「はい…但し、ここここは、それぞれ別の集団…あとここに港町警察署の捜査員…」

「ありやく、港町署まで、出張って来てんのかー、余計身動きとれんぞ！」

「港町署の捜査員は、私が白山亭の軽ワゴン車で門を潜るのを複雑な顔をして見てましたよ」

「…だろうな。お互い身内だものな(港町警察署の署長とD AとH Gは曾祖母が同じ)…港町署はこの際、ウチが地元の連中(C国マフィア集団)事務所みたいに襲われるのを守ってくれていると思うのが正解かな？」

「私もそう思います」

「それでな、用と言うのは、この通り身動きがとれんので、お前に動いてもらおうと思って呼んだんだ」

「はい、何でしょう？何をどう動けがよろしいので？」

「実は、ウチの子分（構成員）が何人かやられた…みな街中で。ある者は鉄パイプやボール、ハンマーで襲われ、あるものは拳銃で撃たれた…」

「そんなに！」

「だから、儂からお前に子分を痛めつけた犯人を探し出して欲しい！」

「…それって、警察の仕事じゃ…」

「馬鹿者！警察も動いてるが、お前も自警団として探すのを手伝ってくれと言っている」

「はい」

「それでは、なにか手掛かりの様なモノはありますか？」

「まずは、コレ！」

と言って、商店街会長は空薬莢を見せる。それを見たHG…独特の形状の空薬莢から

「これって…C国の奴ら（マフィア）の物ではありませんね…どちらかと言えばN国…」

「それ！地元の奴らはこんな当たらないで有名な拳銃（C国のものはN国の模造品で拳銃自体の造りが悪いので有名）使わないで、専らA国やI国の拳銃を使うんだ…なんか変だろ？」

「はい」

「それから、港町の海岸道路沿いの雑居ビル街の中の△××ビルに、ウチの子分をやった奴が出入りしていると言う話だ…そこをあたってもらえねえか？」

「なるほど…わかりました」

「…ところで、向こうの棟梁（地元C国マフィアのトップ）との話し合いの結果は？」

「あっちは、事務所を襲撃され、今は地下に潜っているそうだ…『襲った連中は同胞なので、

こちらで何とかするので手出し無用』と言っていた」

「そうですか…」

H G達は葛葉組を後にした

●女の闘い

H Gが帝都への外出からY国際港駅に降り立つと、

「あら…H G社長！」

と呼び止められた。呼び止めたのはT K。

「…おや、珍しい…電車で来られたとは…」

「私だって四六時中B侯爵様と一緒に居る訳ではありませんわ…今日は休暇です」

「今日は平日ですが…」

「…だからあ…B侯爵様の秘書はなにも私一人ではありませんのよ…私含めて三人居ます…もつとも、B侯爵邸に泊まり込んでいるのは私だけです…」

「そうですか…それでこちらに休暇をお過ごしに？」

「はい」

確かに、今日のT Kはいつものフォックスグラスの眼鏡にバリツとしたビジネススーツ姿ではなく、ボストングラスの眼鏡でワンピースの上にボレロジャケットを羽織っていた。

「白山亭にお越しで？」

「はい…いつもの白山亭ブレンドコーヒーと、今日は白山亭サンドウィッチを食べてみようかと…」

「それは、それは、当店自慢の二品…いずれも、私の曾祖母と祖母のレシピを忠実に再現した逸品ですよ」

とH Gは笑顔で言って、T Kと改札口を出る。

駅前のロータリーを回り、通りを渡って白山亭に入る。

「いらっ…お帰りなさいませ。社長」

と言う、女給に

「ただいま…それからお客様を駅からご案内してきた」

「いらっしやいませ、ご希望の席はありますか？」

「バーカウンターの席が空いているかしら？」

「はい、ご案内いたします」

と女給が言うのを

「私が案内するよ」

と言って、H GがT Kをエスコートする。

バーカウンターに居るT Tは、いつもと雰囲気が違うT KとH Gと一緒に店に入って来たことと、更にT KをエスコートするH Gに嫉妬した。

T Kがバーカウンターに座り、白山亭ブレンドコーヒーと白山亭サンドウィッチを注文すると、

「ちよつと、母屋に荷物おいて来る」

とH Gが言って、バーカウンター横の従業員出入口に向かうときに、T Tは

「帝都の電気街でなにか良いモノが買えましたか？」

と訊ねると、

「おう、新兵器を買ってきた」

H GはT Tの質問に子供の様に答えた。その反応に（いつもの反応ね…駅でたまたまあっただけね）と安心した。

T Tはバーカウンター越しにT Kの相手をする。

「今日は、どのようなご用件で？（何しに來たのかしらあ？）」

「今日は休暇ですので、こちらで昼食をと思ひまして…（用も無いのにコーヒーとサンドウィッチ目的に來ちゃいけませんか？…あと、HG社長もお目当てですが…）」

「そうでしたか…いつもと違う服装と雰囲気でしたので…そう、休暇ですか…（この前、准尉と会食したからって、いきなり碎けた服装しないでくれます）」

「そうですね！（あら、あなたに言われるいわれはなくてよ）」

「私が見慣れているお客様は、いつもフォーマルなビジネス服をバリツと着こなしている姿でいらしてたので、今日のようなカジュアルな服装は初めて見ました…（何よ！その服でこれから准尉を誘惑するつもり？）」

「そうですね、ここに來る時は確かにビジネスの時ですわね…おほほ（私だって、休みの時くらいはカジュアルな服装ますのよ、それにHG社長にお会いするのに、一々あなたの許可が必要なんて聞いていませんわ）」

と、お互い心の声丸出しで、まるで、見知らぬ犬同士が睨みあつて威嚇している様な女同士の舌戦が始まった。

その光景を店内で見ていたHY…

「ヒッ！（わ…わたしには、とても突っ込みをする隙がない！）」

と言つて、HYはTTとTKの舌戦に恐怖した。

HGが母屋から店に戻ると、TTとTKの様子を見て一言

「なんだ、もう仲良くなったんだ」

と能天気と言つと、

「誰がでしょうっ！」

TT、TK共にHGに笑顔を返すが、目が笑っていなかった。

● 潜入調査

T TとT Kが剣呑な空気になったので、H Gは食事が済んだT Kを外に誘った。それを嫉妬するT T…

H GはT KとY国際港に続く商店街を歩きながら、

「このY国際港は、本来は静かで港町の情緒あふれる街なんです…」
と口を濁して案内するH Gに

「？」

と不思議そうな顔でT KはH Gを見つめた。

「いや…このところ地元マフィアの抗争が激しくて…今物騒なんですよ…お恥ずかしい」
とH Gが申し訳なさそうに言うと、T Kは周りを見回して

「そうなんですか？」

「はい…本来ならゆっくりご案内して差し上げたいのですが、私が護衛できる範囲でご案内して、早めに安全な帝都にお帰り願いたいです。抗争が落ち着いたら、後日またゆっくりと…」

とH Gが話している途中で、

「あの一、私に手伝える事ありませんか？」

T Kはキラキラした目で言った。それを見たH Gは目が点になった。

「はい？」

「いえ…普段（B）侯爵様に附いていますと、精神的に疲れて…こんな血が騒ぐ…失礼！拳銃無頼小説の世界みたいな状況って、滅多に味わえないのでえ…」

と、嬉しそうに話すT Kを見て（この人、ひよつとしたらバトルジャンキー？）と思ってH

Gはドン引きする。HGがドン引きするのを見たTKは首を傾げて

「…あら、私変な事言いましたかしら…」

と言うTKに（無意識かよ！）とHGは心の中で突っ込んだ。

「いいですか…この先、抗争現場で銃撃戦に巻き込まれるかもしれませんよ」

HGはTKに早く帝都に帰って欲しくて脅かす様に言うと、TKはHGの心情を理解する気が無く、

「いいですわぁ、私〃特別銃器携帯・使用許可証〃持っていますし、拳銃持も持っていますのよ！」

ハイテンションで言うTKに、（えっ？持ってたの！）と更にドン引き気味のHGは気落ちして、仕方なく

「…分かりました。ただ、私の言う事を聞いて下さいね」

と言うと、TKはパアツと明るい表情で「ハイ！」と返事をした。

「では、観光案内ではなく、私本来の仕事について来ていただきます」

「ハイ！」

と嬉しそうに返事をするTK

「実は、私は地元自警団の一員として、マフィアの抗争相手の地元任侠集団の親分からマフィアのアジトを探るように依頼されています」

「イーですわね」

と言うTKにHGは（ヤバイ…この人ヤバイ！）と思った。

そんなHGにTKが

「ところで、質問がありますがよろしいですか？」

「はい、何でも？」

「なぜこの調査にHG社長自ら当たるのですか？碇屋の方々はお使いにならないのです

か？」

「それは…依頼主は実は私の身内です…この調査も私個人の立場で行動しています…です。抗争の理由が分からないし、報酬の無い現在では、碇屋のエージェント達は使いたくないのが本音です…ですから、TKさんも私は巻き添えにしたくないです…」

と、HGが正直に吐露すると、

「わたしが邪魔ですか？」

「ええ…できれば、あなたには安全な所に帰って欲しいです」

とHGが言うと、TKは狂喜して

「嬉し〜！」

と言った。

「????（ヤバすぎる…F県領地の事件でのIYの死にたがり症候群（「巻き込まれ親父の撤退」参照）より、その家庭教師のこの人の方がもつとヤバイ!…本人が一度死にかけたかなのか?）」

とHGが驚いていると、

「O島の時もそうですが、一見よそよそしく振る舞って…傍観者のふりして、身近に寄せ付けないようにして…実は周りの事に細心の注意を配って…そう言う優しいところ…私は大好きですわあ!」

と言うTKの発言にHGはまたドン引きした。（しないで素直に喜べよ!作者(笑)）

「……ありがとうございます。では行きましょうか…」

HGが、がっかりして言うと

「ハイ!」

とTKが明るく返事をした。

港町の海岸道路沿いの雑居ビル…

入り口でビルを見上げるHGとTK。

「ここは？」

と訊ねるTKに

「私が地元任侠集団の情報から、どうも抗争相手内でも内部紛争があるらしく…その一方の勢力がここにアジトを構えているらしいので、調べようと思って」

「そうなんですね」

「…ですので、ここからはこの雑居ビルにあるBarを探して迷い込んだカップルのふりをしていただけますか？」

と言って、HGは雑居ビルのテナントの看板を指した。

「ハイ！喜んで」

HGは担いでいたザックからトランシーバーの様な機器を取り出した。

「それは？」

「探知機ですよ。盗聴器や盗撮カメラのね…この手のアジトはライバル達によって盗聴器等を仕掛けられるのが日常茶飯事です。またそれを逆手に取ることもよくあります」

「…そんなモノどこから手に入れるのですか？」

とTKが呆れて聞くと、

「帝都の電気部品街です。あそこのダークゾーン（裏社会）には、この手の機器が溢れていますよ…ま、当然盗聴器や盗撮カメラもありますけど…」

とHGはシレっと言った。

HGは探知機を操作しながら、TKと廊下を歩く。その間雑談をしながら歩く…この場合、黙っているより、怪しまれないし、盗聴器の中には音声を拾った時だけ動作するタイプがあるため。

H Gはポケットからメモ帳を取り出すと、走り書きでT Kに「盗聴器発見。そのまま話を続けて」と示した。T Kは頷くと会話を続けた。

H Gは盗聴器が使用している周波数をメモすると、「次、行きます」とメモに書いて示した。T Kは頷くと、またH Gと他愛のない会話をしながら廊下を歩いた。

その途中でT KはH Gの袖を引き、小声で

「(…随分、手慣れている様ですが…)」

と訊ねると、H Gは

「(はい、実は芸能事務所の依頼で、部屋に仕掛けられた盗聴器を探すと言う事がよくありまして…その為の機材です。先程帝都で新型機を買って来まして…)」

と言うと、T Kは納得して

「(そうでしたか…Yお嬢様のご友人のI M様の所でもですか?)」

「(はい、I Yはこれまでにいくつか見つけていますよ(「巻き込まれ親父の警護」参照))」
と言って、二人で笑いあった。

その時、数人のC国マフィアらしき人物に出くわした。咄嗟にH GとT Kは雑居ビルに迷い込んだ熟年カップルを気取って通り過ぎようとした。その時、

「待てえイ!そこを動くな」

と通り過ぎた後ろからマフィアに呼び止められ、H GとT Kは立ち止まった。

「あのー、何でしょうか?」

とH Gがオドオドしながら言うと、T Kも、

「私達はこの中で迷ってしまつて…出口を教えてくださいませんか?」

とH GとT Kは即興で怖がる演技をして振り返った…とても即席コンビとは思えない見事なチームワークである。

「…それで?ここから帰すわけにはいかなねえなあ」

と言って、マフィアの一人がズボンに無造作に差している拳銃を抜いた。その途端、HGが相手の拳銃を蹴り上げると同時にTKを自分の後ろに庇った。

マフィアがひるんだ隙にHGはTKの手を引いて逃げ出し、ドアの空いている部屋に飛び込んだ。

マフィアは狭い廊下で拳銃を撃ちまくる。威嚇なのか拳銃の精度が悪いのか、はたまた撃ち方が悪いのか、撃った弾は全然HG達が潜んでいる部屋の入り口の柱にかすりもしない。

HGは部屋の入り口から廊下を覗き見ながら

「あゝあ、無駄な弾を…ウチ（碓屋のガンスミス）で整備してやりたい…」

「そんな悠長なことを…」

とTKが突っ込む。

HGは廊下の様子を伺っていると、TKがHGの肩越しに

「ここは、素直に帰してくれそうもないですわね…血路を開きましょう！」

といって、TKはハンドバックから拳銃を取り出した。それを見てHGは

「ずいぶん古い銃ですね」

と言って、驚く。

「…最近の銃はどうも無骨すぎて好きではありませんわ…それにこれは携帯性に優れていますが、余計な突起とか少ないので、コートのポケットやハンドバックなどに忍ばしていざ抜く時引っかけかりなく楽ですよ」

と自慢すると、HGも納得し、

「そうですね」

と言って、HGも懷から愛銃を抜いて、安全装置を外してスライドを引き、銃身に弾丸を装填した。それを見たTKは

「H G社長の拳銃も、私の事言えた義理ではありませんわね」

と呆れて言うと、H Gは苦笑して、

「ハハハ…そうだ、それから、これを着てください…見た目は悪くなりますが」

と言って、H Gは担いでいたザックからD国大使館から受け取った最新の防弾インナー上下一式をT Kに渡す。それ見たT KはなんでH Gが自分に7分袖のTシャツとスパッツのインナーを渡すのか分からず

「結構です。…それに、これ女性用ですわね…」
と断った。

「まあそう言わないで…これはD国製の最新の防弾インナーです。帝都に行ったついでにD国大使館から受け取ってきたサンプルです…これはI Y用です。防弾効果は国産のより格段に上の性能を持っています」

とH Gが言うと、T KはH Gの意図を理解し、H Gから防弾インナーを受け取ると、

「…あの…しばらく、あっち向いて貰えますか？」

と言ったので、H Gは「ハイハイ」と言って、T Kに背を向けた。

「H G社長…よろしいですわ」

「では、始めましょうか」

「はい」

H Gは正確な射撃で廊下の突き当りに居るマフィアの拳銃を打ち落とす。T Kはその間に他のマフィアに対して牽制射撃をした。

「ナイス援護です」

「とても即席コンビとは思えませんわあゝ」

と言って、T Kが興奮してH Gとハイタッチをする。

マフィアが撃ってこなくなった隙について、H GはT Kの手を引いて廊下を走りだす。マ

ファイアの追撃を考え、TKを先に行かせて、HGは彼女を後ろからカバーするように走った。

「HGおじさん、こっち！」

HGが呼び止めた相手を見ると廊下の角からRSが手招きしていた。HGはTKを連れてRSの居る廊下に行く。

「よう、Sちゃん。お前さんもここに用があったかね」

「おじさん、ワタシと同じ事考えてたわね」

「あもうHG社長…その娘は？」

とTKが訊ねると、

「RSと言って、私の親友の娘です」

「ご親友の？HG社長の会社の娘じゃなく？」

「この娘はC国の国家調査局員です」

「挨拶は、あと！サッサと逃げるよ！こっちに非常口がある」

「そうだな」

HG達は、非常口に向かって走り出した。逃げる途中でマフィアからの流れ弾が背中に当たり、気を失って倒れるTK。HGはTKの腕を取り、肩に回すとTKを引きずって非常口の外に出る。そこでHGは担いでいたザックから閃光弾を取り出して中に投げ入れる。その隙に安全な場所に逃げる事ができた。

気を失っているTKを起こすHG。気が付いたTKは

「また、あなたに助けられましたね」

と言って、TKはボレロの下に着こんだD国製の防弾インナーを指して言った。

「ここで、あなたに何かあったら、B侯爵様と、IYに申し訳が立ちませんので」

「…あら、嬉しい」

「こんな所で、ラブコメしない！さっさと逃げる」

R Sの突っ込みに、一時期いい雰囲気になったH GとT Kは手を取り合って逃げ出した。

●家族でしょ！

H GがT KとR Sを連れて白山亭に戻る。

R Sを見たT Tが

「准尉！あなたって人は…また外で子供作ってたんですか！」

との言葉にH Gは驚いて、

「なんじゃそりゃ〜！」

と言うと、T TはR Sを指さして、

「だって…その娘…」

「あく待て待て…T T。この子はR Sと言って、近所のR 交易商公社の社長の娘だ」

「R 交易商公社って、お店のコーヒー豆とかお菓子を卸している？」

「そうだよ。あそこの社長とは親友だって、お前ら知ってるよな」

「はい…」

「近い歳の女の子いたんですね」

とI Aが言うと、

「R 交易商公社の社長R Rの末娘のR Sです。最近までC 国内に居ました。よろしくね」

と言って、挨拶した。

「そういえば、准尉！T Kさんとは何をお楽しみだったんですか？」

とT Tが詰問口調でH Gに言うと、

「T T…意地の悪い事言うな！T Kさんとは、ドンパチに巻き込まれて逃げてきたんだ…」

その途中でRSに助けられた」

「えっ、ええっ」

TTが驚き、

「そっ、それで、どーしたんですか？」

と訊ねると、

「いや、彼女拳銃持ってて、援護射撃してもらった…」

とHGがシレっと言うと、

「何ですってっ！(そんな…おいしいところを…准尉と二人で…このアマ…っ)」

TTは今にでも卒倒しそうな声で言った。

「准尉、なんでそんな危ない事を…」

HYが心配顔でHGの顔を覗き込む

「それには理由があつてな…葛葉組の人が何人か襲われて、中には撃たれた人も居るので、親父さんの指示で相手のアジトを探していたんだ」

「あっ、葛葉組の事務所ですしていた話ですね。そうだったんですか…でもなんで、わたし達娘を使わないのですか？」

「それは…もう…お金にならないから…親父さんからは、ここ(白山亭とそれに附随する母屋などの建物全部)の改修費用を無利子・無担保で出してもらってるし…」

「だったら、尚更わたし達娘や息子を使って下さいよ！家族なんだから！！白山亭の借金は、いまや親父だけではなくて、わたし達娘や息子も返済するものでしょ！」

「そーなんだよな…でも相手がいきなり発砲してくる連中なんで、お前達を危険に晒したくないのが本音…」

「あの一その心遣い、誠にありがたいのですが、わたし達娘って、なんですか？碓屋のエー

ジェントって何ですか？そんな勿体ぶって使い惜しみすると、親父がまた入院する事になるでしょ！」

H Yが凄い剣幕でH Gを責め立てる。H GはH Yの剣幕にたじろいだ。

T KはH GとH Yのやり取りを見て（羨ましい…）と思った。

Y 国際港駅改札口…

「これから、面白くなりそうなのに、ここで私だけ帰るのは残念です…クスン」

T Kは残念そうに言った。

「平和になったら、また遊びに来てください（この人、本当にバトルジャンキーだ…）」

「…ハイ」

H Gは、帝都行きの電車に乗るT Kを見送った。

T Kを駅で送って、白山亭に戻ると、T Tが膨れていた。

「どうした？T T」

「なんか、急にT Kさんと仲良くなって…妬けます」

「お前さん達に嫉妬してもらえるなんてありがたいね」

「…そんな、茶化さないでくれますか？本当にT Kさんとは街を観光してついでにドンパチに巻き込まれただけですよね？」

H GとT Kの中を疑って嫉妬するT T…H GはT Kの事を話す。

「いつにもなく疑い深いなあ…それだけだって！…もつとも、彼女は撃たれたけど…」

「なんですってえー、で、彼女は？…あつ、店に帰って来た時は、何でもなさそうでしたが…」

「例の防弾インナー、帝都の電気街に行ったついでに、D 国大使館に寄って、新品の防弾イ

ンナーのサンプルを受け取ってきたので、彼女に貸した」

「何ですと？あのお…（女と言いそうになったが、それを飲み込み）あの人に貸したのですか？」

「ああ…おかげで、至近距離から撃たれたが、彼女は無事だった」

「…そうだったんですね」

とTTはTKが防弾インナーに救われた事と、実験台になった事…どうやっていいのか複雑な気分になった。TTが複雑そうにしているのを、HGは更に

「TKさんは、昔軍に居た頃、俺と出会っていたそうだ…戦場で…。この前会食した時、彼女が話してくれた。彼女の居た部隊のおかげでSKは片足を切断しなくて済んだんだ」

「…えっ？そんなことが…」

TTは、HGの話からHGとTKが自分より遥か以前に出会って居た事を知った。

「…分かってくれたようだね…それから、あの人は『産まず女』なんだそうだ…可哀そうに…」

「エッ？」

「若い頃、戦場で体調が悪くなって子宮を摘出したそうだ…」

とHGがTTに肩を落として言うと、TTは涙を流して

「どうしたTT？」

「…ごめんなさい、准尉…」

と言って、泣いていた。TTは子供が居るので、この先子供を望むことができないTKに対して同情と慙愧の念に駆られて泣いているとHGは感じた。

「あのう、准尉」

「なんだ？」

「TKさんは…」

「彼女は腕がいいね、バトルジャンキーのともあるが…」

「ではやはり…こちら(碓屋)に？」

「いや」

「はい？」

「彼女はそのままB侯爵に仕えるのが彼女の幸せだと俺は思う…たまにガス抜きに来ていただくことはやぶさかではないが…せめてKお嬢様が成人して家を出るまではあちらにいて欲しいな」

「そうですね…(ああ、安心した！)」

夜になり、HGは昼間TKと潜入した雑居ビルの下に行き、ビルとビルの間に身を潜めた。

HGは昼のこの雑居ビル内で記録した周波数に探知機のチャンネルを合わせる。

探知機につなげたイヤホンから人の話し声が聞こえてきた。(C国語…だな、内容は分かるん！取り敢えず録音しよう…)

その時、背後に人の気配がしたので、驚いて懐の拳銃に手をかける。

「(HGおじさん…ワタシ…RSよ)」

と小声で語りかけてきた…確かにRSの声と認識して、HGは拳銃に手を掛けたままゆつくりと振り返った。

「おじさん、ストップ！拳銃抜かないで！」

そこには両手の平をHGに向けているRSの姿があった。

「…脅かしやがる！」

「やっぱり、ここに戻ってきたのね…ったく、で今度は何しているの？」

「昼間、このビルにある盗聴器を探していてね…今その内容を録音しているところ…あつ、丁度いい…C国語だから、Sちゃん聞いてみてくれるかな？」

「えっ、おじさん昼間そんなことしてたの？ワタシでつきり逢引きかと…」

RSは昼間のHGとTKの行動を知ってて、からかう。

「(お前もかい！) そのことは、後で話す…取り敢えず聞いてみて」

「うん」

HGは持っていた探知機のイヤホンをRSに渡す。RSはそれを受けとり、耳に付けた。

「…ホントだ…ふんふん…えっ？…えっ？…ええっ？」

「なんだ！なにか分かったのか！」

驚くHGに、RSはHGを見て

「…おじさん、これ…ヤバイ会話…ヤク(違法薬物)の取引の話だよ」

「マジ？」

「おじさん、この会話録音して！」

「もうやってる」

室内の会話が途切れ、なにかバタバタとした音が聞こえた。それを聞いて、RSはイヤホンを外して、

「おじさん、引くよ…連中外に出てくるみたい」

「その様だな」

HGはRSと雑居ビルを離れた。

白山亭に戻り、録音した音声データのコピーを渡すのと引き換えに、RSに会話の内容を
通訳してもらった。

「嘘を言っても、後で翻訳ソフトにかけるからバレるぞ！あと、俺のスマホの画像をおかー
さんに転送するからな」

とHGが言うと、RSは膨れて

「分かっているわよ！」

RSの話しでは、このアジトに居るのはやはり青虎舎の連中で、近々Y国際港の貨物埠頭で違法薬物の取引が行われるとの事。それを邪魔されるのを防ぐために地元の緑龍城の事務所を襲撃したそうである。また、港町の小高い丘の上に高級住宅地に別のアジトがあると言う情報も入手できた。そこで、外部から電話があり、慌てて出て行く事も録音されていた。

●KK団

夜間、母屋の縁側で一人パイプタバコを燻らしていると、その先の暗闇に人の気配を感じた

「誰だ！」

と言って、HGは足元の拳銃を持ち構えた。

「拳銃を撃つのはおやめなさい、私の姿が見えますかな？…私は“KK団”と言う盗賊の棟梁です。HG社長、あなたにはこの件から手を引いていただきたい」

「この件とは？」

「近々行われるC国マフィアがY国際港での違法薬物の取引についてだ」

「なぜ？」

「我々は、C国マフィアの運転資金を奪う予定だ。そこで地元のあなた方に聞かれると厄介であるのと、あなた方に迷惑がかかる」

「ほゝお」

「これから行われる取引と、地元任侠集団とのいざこざは、全く関係ない…この取引はC国マフィアとN国マフィアが我が国を隠れ蓑にして行われている迷惑千万な取引だ。そのため連中の上前撥ねても我が国には痛くも痒くもない」

「成程」

「どうかね？悪い取引ではないと思うが…」

「そうだね、そっちはそっちでやってくれたまえ。こっちはそんなお金に興味がない…我々は身内をやられているからな、地元でおいたする奴らを捕まえるだけだ…それでどうかな？」

「成程、取引は成立したと思ってよいのかな？」

「但し、お互いの行動範囲が被った場合は…しらんけど」

「…はは、そうですね、こちらが今探している奴らの金の隠し場所と、そちらの捕り物の場所が重なった場合は、こちらはその間は手出ししないと言うのはどうかね？」

「いいだろう…あとそれから」

「なんだ？」

「お互い、相手が探している目標を先に発見した場合は、知らせると言うのは？」

「では、取引が成立したと言う事で、何かの時の連絡先はここに…」

と言って、暗闇の中に居る人物が丸めた紙をHGに投げる。

紙には、連絡方法が書かれていた。

●金庫発見

港町の小高い丘の上にある廃屋…

「こんな所に…」

HGはHYを伴い廃屋を前にする。HGは廃屋を塀の外から眺めながら、

「廃屋の主は元C国の高官と言う事だが、今は不良債権の物件になっているそうだ…なんでも、汚職で逮捕されて財産没収にあったそうだ」

「そうですか」

「そのまま、入ると不法侵入…か」

「准尉！そこでこれの出番ですね」

と、HYはバックから小型ドローンとヘッドマウントディスプレイを取り出す。

「そうだ：HYお前操縦してみるか？」

「ハイ！」

HYがヘッドマウントディスプレイをつけてドローン进行操作する。HGはスマートフォンの画面でそれを見ながらHYに指示を出す。

「そのまま空いている窓から入って」

「はい」

ドローンは廃屋の窓から入り、部屋の中を飛びまわって中の様子を見渡してから、廊下に出る。廊下で360度定点回転して廊下を見渡す。中は廃屋を使った肝試しでもしたのか、それともホームレスが居たのか、内装は壁紙があちこち剥がれ、所々に落書きがしてあった。

「HY、そのまま進んで」

「はい」

暫くドローンが移動すると、廊下の突き当りに明かりが見えた。

「HY天井付近まで上昇して」

「はい」

「それからゆっくり突き当りまで：天井にぶつけない様に：」

「はい」

ドローンが廊下の突き当りに進むにつれ、周りが明るくなってきた。明かりは太陽光のものではなく、蛍光灯等の人工的なもの：それに加えてマイクが音楽らしき音と、人の笑い声や話し声らしき音を拾っていた。

「いいぞ！この音楽の音に紛れてドローンが飛んでいる音がさえぎられる：HY、そのまま廊下の突き当りに出て」

「はい」

ドローンが侵入した廊下の突き当りを360度定点回転して見渡す。進入方向の右側の部屋から明かりが漏れているのを見つけた。

「HY、あの明かりが漏れている部屋の入り口まで」

「はい」

HYはドローンを操作して、HGの期待通りの場所にピタリとつける。

「少し上に傾けて、天井との距離を見たい」

「はい」

HYはドローンを上に傾ける。HGは「うむ」と言って、

「よし、水平に戻して」

「はい」

「今度は下に傾けて」

「はい」

「成程…よし水平に」

「はい」

「それでは、部屋の中をしてみるか…HY左90度定点回転」

「はい」

「よし、いいぞ！そのまま…」

HGは部屋の中から漏れ聞こえる音に注目した。音楽の音が大きいので、よく聞き取れないが、会話の言語は明らかにC国語ではなく、むしろN国語の響きだった…首をひねるHG。一応、音を録音する。

「では…本日の山場〜！」

とHGは言って、スマートフォンでドローンの映像を録画するボタンをタップすると、

「H Y、徐々に高度を下げて、部屋の中が見えたら、すぐに上昇…ただし天井にぶつけない様に！」

「はい！」

H YはH Gの指示通りにドローンの高度を下げる…壁の画面から部屋の中が一瞬映し出され、すぐに壁の画面になる。

「いゝぞ、回収しよう」

「はい」

H Yはドローンを最新の注意で操縦し、侵入してきたルートを戻り、無事H G達の所まで戻ってきた。

「よし、一旦ここを離れよう」

「はい」

H G達は安全と思われる場所に移動した。

「はい、ご苦労様」

と言って、H GはH Yに缶入りジュースを渡す。

「ありがとうございます」

「それにしても、お前ドローンの操縦上手いなあ…」

とH Gが感心して言うと、

「えへへへ」

と笑って、H Yは

「実は、I AやT Y相手に、部屋の中でコースやアクションポイントを設定して遊んでいました…」

「それ確か！全然画像が揺れたりしなかったし、俺の指示通りに的確に操縦するので驚い

たよ」

「えへへ」

「さて、録画した画像を見てみよう…」

「はい」

HYが録画したドローンの画像を再生すると、部屋の中には映っているだけで3人の外国人：明らかにC国人以外の外国人の男の姿が古びたソファに座ったり、寝そべっている、テーブルの上には酒瓶が多数転がっているのと、スナック菓子等が雑然と置いてあった：その奥には金庫らしき物とその横にテレビとかパソコン等が映し出されていた。

「…驚いた…こいつらN国人だ！」

「なんで分かるのですか？確かに顔つきはC国人ではない事は分かりますけど」

「ここを見て見る…この寝そべっている男の頭の側…N国の拳銃だ…間違いのないこの独特の形は！」

と言って、画面を指さすHGにHYは

「准尉！わたし達はC国マフィアのアジトを探しているんですよね？」

「…そうだ、これはなにか別の意味でヤバいことになっているのでは？…白山亭に戻るぞ」
「はい」

●めんどくせー

白山亭に戻るとRSが窓際のカウンター席でコーヒーを飲んでいた。HG達に戻ってきたのを見つけ、HGの元に行くと、

「おじさん、これな〜んだ」

とRSが握った手を開くと、そこには拳銃弾の薬莢があった。

「薬莢…だね？」

H GはR Sの手を覗き込んでから、上目でR Sの顔を見る。

「そつ、あの雑居ビルで拾ってきた…」

R Sの手の上にある薬莢は、普段H G達が使用する拳銃より大口径で、H Gが葛葉組の所で見た薬莢とは全く別の物だった。ちなみに、T Kが使用した拳銃はH G達の使用する拳銃より小口径。

「…連中（雑居ビルでH G達に撃ってきたマフィア）、この弾を使う拳銃で俺を撃ってきたの？ よっぽどの下手くそ…俺がインストラクターやってやりたい」

「そー言う話じゃなくて…」

R Sは呆れて言った。

「でも、よく拾ってこれたね」

「なんか連中慌てているようで、今あのアジト留守にしている…だから入り込むことができたのよ」

「アジトの中に？」

「うん」

「なにかあったかい？」

「それは…言えないよ…こっちも仕事だから…」

「ケチ！ おとーさんに正体ばらすぞ。おかーさんに画像送るぞ！」

とH Gが脅かすと、R Sはふくれっ面になり、

「…分かったわよ！ ヤク（違法薬物）の取引場所と日時！ 紙とペン貸して」

R SはH Gの渡したメモに違法薬物の取引場所と時間を書いた。

「ほう？ 明日の晩か…早いな」

「でも…この現場は、ワタシ達（C国の国家調査局）で抑えるから、邪魔しないで！ それから警察に教えたらタダじゃおかないよ！！」

「分かったよ」

「約束して！」

「はいはい」

白山亭の従業員出入り口から母屋に向かう途中で

「…すると、葛葉組の子分の一人を拳銃で撃ったのは、やはりN国のマフィアの構成員と言
う事になる…親父さんが見せた葉莢と拳銃の種類が一致したから、なんか辻褄が会ってき
たな…めんどくせー」

H Gはドローンで録音した音声解析できないかと、P Cを使って音源解析を始めた。何
とか言葉らしきモノが聞こえる様になったが、なにを話しているか理解できなかった…翻
訳ソフトに試しにかけて見たら、会話の後ろで流れている歌声が邪魔して理解不能な訳が
できた。

「N国語が解る人が居ないかなあ…」

H GはダメもとでM PとA Mを呼び、音声を聞かせると、A Mは

「自分は分かりません」

と言い、M Pは

「ワタシ何とか分かりそう…もう少し、会話が鮮明に出来んか」

と言った。

「ヨシッ！もう少し頑張ってみよう」

とH Gは各種フィルターソフトを駆使して、会話が聞き取れるようにして、M Pに聞かせた。
M Pが言うには、

会話の内容は、C国マフィアを毘にかけて、C国マフィアのお金と裏市場を奪おうとして
いる事と、C国マフィアの青虎舎の金庫は既にN国マフィアの襲撃により確保されている

事。N国マフィアのマジトは、Y国際港の貨物埠頭にあるN国の貿易商の倉庫の事務所らしい…と言う事が解った。

それを聞いて、HGは呆れて

「ベタだな…港の倉庫とは…」

「ホント、ベタベタネ」

とMPが言った。それを聞いて、HGは嬉しそうに

「最近、うまい事言うようになったなMP」

「ハイネ、AMと練習してる」

「あいつ…やっぱり芸人目指してるな！」

と言って、MPと笑うと(すると…廃屋の金庫はC国マフィアのもの…RSの話では連中のマジトは誰もいない…取り返しに行っただろうな…RSはそれを知ってて教えなかったか!)と考えた。

●KK団の律儀

夜間、母屋の縁側で一人パイプタバコを燻らしながら、今まで見聞きしたことを整理していると、その先の暗闇に人の気配を感じた

「誰だ！」

と言って、HGは足元の拳銃を持ち構えた。

「拳銃を撃つのはおやめなさい、私の姿が見えますかな？」

と、盗賊KK団の棟梁の声がした。

「…今度は、見ることが出来るぞ！」

と言って、構えた拳銃に付けてあるライトを点けた。

「おっと、いつもの拳銃ではありませんな…」

「それから…これもね」

と言って、拳銃を構えている反対側の手で暗視カメラを持ってかざした。

「…これでは、話になりませんね」

と、KK団の棟梁が言うと、HGは構えた拳銃のライトを消し、また暗視カメラを縁側に置いた。

「ま、あんたが俺に対して挑戦的な事を言ったので、その対抗策を示したまでだ！で、何の要件だ？」

「HG社長が金庫を見つけていただいたので、我々もあなたが探している人物の居場所を提供しましょう」

「探している人物？」

「そう、葛葉組の構成員を拳銃で撃った犯人…今現在は丘の上の廃屋に4人の部下と共に居る…この写真の人物だ」

と言って、HGに重りの入った封筒を投げつけた。KK団の棟梁はN国の用心棒の写真と居所を教えてくれた。

目の前の暗闇に人の気配がしなくなると、HGはKK団の棟梁と名乗る人物から提示された写真と廃屋で録画した画像を見比べた。

「…こいつか！」

画像のソファーに寝そべっている男と写真の人物が一致した。

● 作戦会議

翌日、HGが調べた結果を元に、碇屋エージェントメンバーとTTを母屋の食堂に集めた。

「あゝ、今回は、商店街会長である葛葉組の親分さんから、皆も知っている様に、ここ最近葛葉組の構成員と地元のC国マフィアとの間での喧嘩などの事件が商店街近辺で続発して

いるので、調査してくれと話があり、ここ（白山亭）の改修費用などを無利子・無担保で借りている立場なので、無下に断る訳にもいかず、俺個人の持ち出しで調査していた所、ある事実にとり着いたので、皆聞いて欲しい」

「「は？」」

「まず、葛葉組ともめているのは、地元C国のマフィアではなくて、別のC国のマフィアで、最近この地に来て地元C国のマフィアの縄張りを乗っ取ろうとしている。次に、この他所から来たC国のマフィアは違法薬物の取引をこの街で行おうとしている。相手はN国のマフィア。場所はY国際港の貨物埠頭、取引時間は…今晚だ。また、葛葉組の構成員が拳銃で撃たれたが、撃ったのはN国のマフィアの構成員らしい…」

「「エーッ？」」

「更に問題なのは、N国のマフィアが他所から来たC国のマフィアを罠にかけて、そのC国マフィアのお金と裏市場を奪おうとしている事。それから、既にこのC国マフィアのお金のある金庫は既にN国のマフィアに抑えられていると言う事。で、ウチとしてどうするかを話し合う」

と言つて、HGはいつもの親父モードに入る。

HY「すんごい、複雑！めんどくさ！」

TY「他国同士の縄張り争いだから放っておいてもいいのでは？」

IY「そうもいかないですよ…この港町を足場にされているんですから」

TY「そっか」

HY「どう解決すれば、理想…というかゴールなのか分かんないわねえ」

MP「ミシナ殲滅！」

HG「できれば、そうしたいんだけどね…」

TT「地元の人達の平和もありますしねえ…どちら（葛葉組と地元C国のマフィア集団）も

必要悪ですし…」

H G 「あと、言い忘れていたが、この違法薬物の取引については、C 国の国家調査局が関わっている」

A M 「どの様に？」

H G 「あちら（C 国の国家調査局）の目的は違法薬物の取引現場を押さえて違法薬物が市場に出るのを阻止するのが目的。あとC 国とN 国のマフィアを捕まえたいと思うよ」

I A 「それって、警察の仕事じゃないの？」

H G 「あちらさんも、メンツってモノがあるんじゃないかなあ」

I A 「こっさり、警察に教えたら？」

H G 「それは、C 国の国家調査局からやめてくれと言われている」

A M 「では、自分達は何をすればいいのですか？」

H G 「それね…皆を呼んだのは…C 国の国家調査局を出し抜くのもありだし、N 国のマフィアを壊滅させるのもよし、他所から来たC 国のマフィアを追い出すのもよし…」

A M 「他所から来たC 国のマフィアを壊滅させることはしないのですか？」

H G 「それをやると、元々この地に居る地元C 国のマフィアに対してこちら（碇屋）の心象を悪くするからね…いくら他所から来てシマを奪おうとしても、同胞だから…T T が言ったようにあの人達（地元C 国のマフィア）はこの街にとっての必要悪だからね」

I A 「他所から来たC 国のマフィアのお金を頂くのは？」

H G 「それは、いくら何でも…テレビの探偵モノの見過ぎだよ」

I A 「そうですね(笑)…では、N 国のマフィアに奪われたお金を奪い返して、他所から来たC 国のマフィアに返すのを条件にこの土地から手を引いて貰うと言うのは？」

H G 「なるほど…そういう手もあるね」

T Y 「どうやって、お金を奪い返すのよ…在りか分かってるの？」

H G 「それは、もう分かってる」

とH Gが言うと、H Yは黙って頷き、残りは驚いた。

T Y 「そうなんですか？」

H Y 「うん、分かってるわね。港町の小高い丘の上にある廃屋…」

H G 「でも、多分奪われたC国のマフィアが取り返しに動いたらしい」

H Y 「そうなんですか？」

H G 「R Sの話ではね…」

T T 「准尉！…R Sって娘、何なんですか？」 R 交易商公社のR R社長の末娘」と、名乗ってますが…」

T T が嫉妬絡み気味に抗議する様な訊ね方をする、

H G 「…実はね。あの娘、C国の国家調査局員なんだ…R Rの娘というのはホント…小さい頃遊んであげたから」

「[[[エッセー！]]」

H G 「だから、あの娘は、任務で他所から来たC国マフィアとN国のマフィアについて調査していたんだ…それがこっちの調査と被った事があって、互いに協力した」

T T 「そうだったんですね」

H G 「なので、R Sの仕事の邪魔はしたくない」

A M 「だとしたら、葛葉組の構成員を拳銃で撃ったN国のマフィアの構成員を捕まえれば、こちらのメンツは立ちませんか？」

H G 「成程…いい事言うねA M。なら、他所から来たC国のマフィアはどうする？」

A M 「葛葉組と地元C国のマフィアのどちらかに情報リークして、あちらで対処してもらうと言うのは？それとも…それこそ警察にリークしてあっちの手柄にして貰えば…」

H Y 「それ、賛成！」

I Y 「私もいいと思います」

H G 「他は？」

「「それでいいと思います」」

H G 「では、我々（碓屋）はそれでいく事にする」

「「はーい」」

話がまとまった所で、H Gは皆を見渡し、

H G 「でも、皆で押しかけるのは…多いな…」

H Y 「T T…あなた、一応部外者だから、留守番頼むね」

T T 「えー、私も…」

とT Tが甘えるように言うが、H Yは

H Y 「T Kさんが、准尉とドンパチを一緒やったからと言って、張り合う必要ないじゃない！」

T T 「そーだけど…」

H G 「そーだぞ、T T…今回の連中は問答無用で拳銃撃ってくる連中相手だから、T Tはこれから店に戻って開店の準備をしてくれ」

T T 「そんなく」

T Y 「その方がわたしもいいと思います」

I A 「姐さんの言う通り！」

T Y 「あんたも留守番！シフトでは今日の日中と夜のアルバイトの女給は、誰も居ないから」

I A 「はい…」

とI Aが項垂れると、H Gは、

「作戦は、こうだ。現在N国のマフィアは二手に分かれている。一つは港町の小高い丘の上にある廃屋…元はC国マフィアのアジトだが…もう一つはN国の貿易商の倉庫の事務所。」

この両方をほぼ同時に襲撃する。ただ、港町の小高い丘の上にある廃屋はC国マフィアが奪回している可能性があるので、ややこしくなる。その判断は行ってみないと判らん：従って、こっちは、俺が指揮する。なので、二手に分ける。一組はまず、これから直ちに港町の廃屋を叩き、それからN国の貿易商の倉庫の事務所に向かう。もう一組は、N国の貿易商の倉庫の事務所に先行して監視カメラなどの位置や突入ルートと逃走ルートをチェックの後、待機：一組目の到着を待って踏み込む：但し、取引時間になったら、到着の有無を問わずN国の貿易商の倉庫の事務所に踏み込む。狙うは、葛葉組の構成員を拳銃で撃ったN国のマフィアの構成員。この面を頭に入れておけ」

と言つて、HGはドローンで撮影した画像を拡大した画像を全員と共有した。

「『はい！』」

「それでは、配置を決める。HY」

「はい」

「お前は、俺と港町の廃屋に踏み込む。AMもこっち」

「『は、こ』」

「次、TY」

「はい」

「お前は、Y国際港の貨物埠頭にあるN国の貿易商の倉庫事務所に、MPと共に行け。あらかじめ監視カメラなどの位置をチェックしてIYに連絡する事：俺らが合流するか、または、俺からの連絡で事務所に残っている連中を制圧：と言つても行動不能にして縛っとくだけでいい：後は、C国の国家調査局か：もしかすると水上警察署か国家公安局が来るかもしれない：それは相手にせずに程々にして帰ってきていいぞ！」

「はい」「ハイネ」

「それからドローンとヘッドマウントディスプレイを持ってけ！」

「はい」

「I Y」

「はい」

「お前は、Y 国際港の貨物埠頭での N 国の貿易商の倉庫の事務所ならびに、C 国と N 国マフィアの違法薬物取引現場が見渡せる場所に行き監視。不審な動きがあったら、T Y と俺に連絡しろ！そのあと、T Y 達の支援に回れ」

「はい」

「あと、スナイパーライフルを持って行け…それで監視カメラを破壊しろ！それから無理はしない事！危なくなったらとつと逃げろ…！」

「はい」

「取引日時と時間は、ここにメモがある…タイミングを間違えない様に！各自拳銃の弾はいつもの様に強化ゴム弾、あと T Y はグレネードランチャーを持っていけ！弾は閃光弾 2、催涙弾 2、デモ鎮圧弾 5、I Y のスナイパーライフルは通常弾！」

「[[[はい]]]」

「では、皆の者！いざ出陣…！」

「[[[オー…！（…って、毎度…なんでやねん…）]]]」

H G 達はそれぞれ作戦場所に向かった。

● 廃屋

昼過ぎ…

「さてと、踏み込むぞ」

と言つて、H Gが拳銃を抜いて敷地に入り込もうとすると、

「准尉！さっきここに来た時『不法侵入になる』って言ってませんでしたっけ？」

と、H Yが慌てる。

「それはね、ここに人が居る確証がなかったから…今度は“ホームレスが廃屋に入り込んでいるようなので、自警団としてドローンを使って調査したら、外国のマフィアがいました”と言うオチ…じゃなくてシナリオにする。…ちなみに、その証拠はドローンで偵察した映像ね…」

「なるほどー（えげつなく）」

「なので、総員拳銃抜いてロード（弾込め）！」

「はい」

各自、自分の拳銃を抜いて、スライドを引いて銃身（チャンバー）に弾丸を装填した。

「…では、突入！」

H G達は互いに援護しながら、H Yがドローンで偵察したルートに沿って廃屋の窓の下にとりついて、窓の外から中の様子を、鏡を使って見る。

「グリーン！俺から突入する、続け！」

「はい」

H Gを窓枠に手をかけると、部屋の中に飛び込んだ。H Gが着地点からどくと、続いてH Y、A Mが中に入る。

「准尉！あそこに…」

H Yが差す先に4つの麻袋が無造作に転がっていた。

「…ドローンで偵察した時には、見なかったが…」

H Gは拳銃を構えたまま、麻袋に近づきLEDライトを当てると、麻袋から強い血液の匂いと赤い血が染み出していた…H Gの後ろからH YとA Mが覗き込む。

「死体だ！まだ新しいな…多分、元々ここに居たのと、金庫を奪い返しに来たC国マフィアの構成員だろう…返り討ちにあったな。残りは逃げ出したかしたんだろうな…と、言う事はここに居るのは、N国マフィアと言う事になるな」

H YとA Mが死体だと分かって動揺しないのは、H Yは民兵会社時代に何度も戦場に居た経験があり、またA MはA国に居た時のボディガードや用心棒の経験からである。逆にT Yはこの経験が少なく、I Yに至っては全く無い…H Gはそこまで考慮して人選をしていた。M Pをこつちに連れてこなかったのは、N国の貿易商の倉庫の事務所でのM Pの怪力とショットガンの片手撃ちを期待しているためである。

ドローンで探索したルート通りに廊下を進み、廊下の突き当りで一旦止まる。

「この先に連中（N国マフィアの構成員）の居る部屋がある…」

と言って、H Gは聞き耳を立てた。相変わらずの大きな音楽が聞こえてきた。

「…不用心だな…よくC国マフィアの逆襲を返り討ちにできたな？」

と言って、H Gが廊下を鏡で見ると、床にセンサーとカメラらしきものが見えた。

「…これね…どうりで…ドローンは探知できなかったが、人は探知できるのか…」

「准尉、どうします？」

A Mが聞く。

「もしかして…既に見つかってます？」

H Yも心配そうに訊ねる。

「…うーん、どうだろう…見つかっているのか、そうでないのか…相手が廊下に出て来られるとありがたいけど」

とH Gが困った表情で言うと、A Mは

「金庫を奪い返しに来た連中（C国マフィア）は、なんで返り討ちにあつたのでしょうか？」

「元々、C国マフィアのアジトだよ…玄関から堂々として入ってくるだろ？それで自分達が仕掛けていた監視網を逆手に取られて、待ち伏せされたんだろう…」

「確かに！」

「意外と間抜けですね」

とH Yが言うと、H Gも苦笑いして、

「そうだな」

そんな会話をしていても、部屋から一向に人が出てくる気配が無い…H Gはキレて、担いでいたザックからグレネードランチャーを取り出すと、催涙弾をセットして狙いをつけるが、角度が悪くて直接部屋を狙えない…

「しよーがねーな…H Y、A M…ガスマスク」

と言って、持っていたグレネードランチャーを拳銃に持ち変えて、素早く監視カメラとセンサーを撃つと、すぐにグレネードランチャーに持ち替え、廊下に飛び出し、そのまま部屋の入り口の前を走り抜けながらグレネードランチャーを部屋の中に撃つ。

その間、H YとA Mは慌ててガスマスクをつけると、拳銃を構えて、部屋の入り口にとりつく。

催涙ガスが充満する中、慌てて口や鼻を抑える部屋の中に居るN国マフィアの構成員らしき人物に対して、一度廊下を駆け抜けたH Gが戻ってきて、H YとA Mに「（部屋）中を見るな！」と言って、閃光弾を部屋に投げ入れる。

「「うわー、えげつな〜」」

とH YとA Mは言うが、H Gは

「はい、中に入る！」

と指示した。

「准尉！換気が終わりました」

とH Yの言葉に廊下に居たH Gが部屋に入ると、4人の人物が拘束されていた。

「あれ？例の奴、こっちに居ないぞ！」

H Gがスマートフォンを取り出して、拘束された人物をチェックしながら言った。

「確かに居ませんね。でも、どうしてこっちに居る事を知ってるんですか？」

A Mの指摘に、H Gは

「詳しいことは後で話すが、ある筋からこの人物に対するタレコミがあった…こっちに居るはずなんだが…」

「…確かに居ませんね」

とH Yも言うのと、

「どこに行きやがった…」

H Gは齒嚙みして

「ああー、クソ！M Pが居たらこいつら尋問できるのに…失敗した！！」

H Gは悔しがる…H Yはそれを見て（珍しー）と驚いた。

その時、A MがH Gの肩を叩く

「なんだ？」

「こんな時には、翻訳アプリ！」

と言って、A MはスマートフォンをH Gに見せる。

「…あつ、そうか！」

翻訳ソフトを使って、拘束したN国マフィアの構成員を尋問すると、H G達が探している人物は貨物埠頭に向かったと言う事が判明した。

「H Y！」

「はい」

「お前はここに残って、港町署に連絡…警察にここに居る連中と、さっきの死体を引き渡したら、合流しろ！」

「はい！」

「A Mは俺についてこい！貨物埠頭に向かう！」

「准尉！そんなに慌てて…向こうはT Y先輩達が居るから、慌てなくても…」

「奴は、N 国マフィアの用心棒だ！T Y達が心配だ」

「「H～！」」

●Y 国際港の貨物埠頭

H G達が廃屋で行動を起こしているのと同時刻…

貨物埠頭が見える場所に陣取ったI Y…双眼鏡を片手に貨物埠頭を見渡す。その中にT

YとM Pの姿を見つけた。

「こちらI Y、配置に着きました」

『了解！こちらは、事務所の側まで移動する』

「気を付けてT Y姉さん」

『ちゃんと、見張っててね』

「親父は『監視カメラを破壊しろ』って、言ったけど…ホントに撃っちゃっていいのかしら…親父の事だから『マフィア同士の撃ち合いで流れ弾が当たった』と言う事にしよう…(笑)」
と、I Yは独り言を言って、苦笑した。

N 国の貿易商の倉庫事務所付近…

TYはヘッドマウントディスプレイを着けてドローンを操縦する。その側で警戒するMP…

「ここにも監視カメラがある…結構多いわね…死角が無いみたい…」

TYは一旦ドローンを回収すると、スマートフォンの地図上に監視カメラの場所をチェックする。

「親父は『監視カメラなどの位置や突入ルートと逃走ルートをチェックしろ』と言ってたから、動線を考慮してIYに連絡しないといけないのね…だとすると、この辺をもっと調べないと…」

と言って、ドローンを再度飛ばそうとしていると、MPがTYの肩を叩き、

「TY！ダレカ来たネ」

「MP隠れるよ！」

「ハイネ」

TY達は物陰に隠れるが、あっさりN国マフィアの用心棒が見つかる。拳銃を構えたN国マフィアの用心棒と構成員は

「(N国語で) 出てこい！抵抗するな！」

「MP、なんて言ってるの？」

『『出てこい！抵抗するな！』と言ってるネ…あの拳銃N国製のオリジナルネ…良く当たる』

「…ダメか…」

拳銃を向けられ、TYとMPは手を上げて物陰から出た。その際、機転を利かせて今までチェックした監視カメラの位置情報をIYに送信した。

「(N国語で) 荷物を前に置き、その場に伏せろ！」

「MP…今度はなんだって？」

『『荷物を前に置き、その場に伏せろ！』って言ってるネ』

TYとMPは指示に従った。

N国マフィアの用心棒はTYの持っているザックからグレネードランチャー等を見つけると、後ろに居るN国マフィアの構成員に

「(N国語で) 拘束して事務所に連行しろ!」

と言った。

用心棒に捕まるTYとMP:それを見ていたIY:慌ててライフルを構えるが、用心棒達はすぐに死角に入って撃てなかった。

●対決!HGvsN国マフィア用心棒

Y国際港の貨物埠頭にあるN国の貿易商の倉庫事務所の側に来たHGとAM。IYからTYとMPが捕らえられた事を知る。

『准尉!申し訳ありません!!』

「IY:お前のせいではない:今は気にせず、監視を続けろ」

『ハイ』

「准尉、どうします?」

「ここから見ても監視カメラが多すぎる:警戒嚴重だな…」

HGは少し考えると、

「めんどくせえなア:まだ日没前だし、本当は暗くなつてから襲撃するつもりでいたが、TY達が心配だから、今やっちゃおうか!」

「:…そんな:強引に:…」

心配顔のAMを他所にHGはザックからグレネードランチャーを取り出すと、催涙ガス弾を装填して、

「IY!今分かっている監視カメラを直ちに狙撃しろ!」

『はい？今ですか？』

「そうだ！やれ！！」

と命じたHGを見て、

「んな、今から強襲ですかあ？（なんか、HY姐さん達から聞いている親父の慎重さと違う！）」

と驚いているAMに

「AM」

「はい」

「事務所から出て来る奴らを撃て！無力化しろ」

「はっ、はい」

一方、IYは…

「親父の命令だから、なにか作戦があると思うけど…撃たないと叱られるし…ええい！めんどくせー」

と言って、持っているライフル銃でTYが調べた箇所の監視カメラを片っ端から狙撃する。その隙に、HGとAMはN国の貿易商の倉庫の事務所に取りついた。

監視カメラを次々と潰されていくN国マフィアは慌てて拳銃を片手に事務所から出てくる…それを次々と強化ゴム弾で無力化するAM…その間にHGは事務所に向けて催涙ガス弾を撃ち込む。

催涙ガスに巻かれて更に外に出てくるN国マフィ達…AMはそれを拳銃弾で無力化しながら（なんか、殺虫剤巻かれて飛び出してくる虫を叩いているような…これじゃA国の警察の手口と同じだ…）と、慌てて空になった弾倉を交換する。

HGはガスマスクをして、事務所から出てくるN国マフィア達の流れに逆らい進む。ある

者は至近距離からH Gに撃たれ、ある者は投げ飛ばされる…それを見たA Mは（親父…スゲー）と驚いた。

H Gは事務所の中に突入すると、人が居ない事務所の中で捕らえられていたM Pを見つけて、足に隠してあるナイフを取り出し、M Pの拘束（タイラップ）を外す。

催涙ガスに巻かれて「H G酷いネ！」と文句を言うM Pを外に送り出し、続いてT Yを探すが、姿が見つからない…その時、外に居たA Mが

「准尉！外です！！」

と叫ぶ声が聞こえた。

H Gが外に出ると、T Yの頭に銃口を突き付ける用心棒…H Gはガスマスクを脱いで対峙する。

横目でA Mの姿を探すと、A MはM Pを保護しつつ、拳銃を用心棒に向けていた。

H GはA Mに、

「M Pを保護して、この場から退避！こっちは俺が殺る！！」

A MはH Gの指示に従い、M Pを連れてこの場から去った。

H Gは渾身の殺意を持って拳銃を用心棒に向ける…用心棒はひるむことなく、T Yの頭に銃口を突き付けているのを見て（こいつ…かなり修羅場を潜り抜けているな）と直感した。

用心棒がなにか喚いているが、N 国語なので意味が分からない…分からないので無視するとT Yの命が危ない…こういう時は万国共通…「銃を捨てろ！」と…

仕方なく拳銃を用心棒の足元に滑らせる。

用心棒はH Gの銃を拾うためにT Yに突き付けた銃口を外した途端、T Yがその場にしゃがみ込み、H Gの拳銃をH Gに蹴り飛ばす。次の瞬間、用心棒は拳銃を持った腕を撃ちぬかれる。撃ったのはI Y。H Gはその隙に自分の拳銃を拾い、ホルスターに収めると、用心

棒に飛び掛かり、投げ飛ばす。

後から駆けつけてきたHYがTYを保護し、用心棒はHGにより拘束された。

HGは港町水上警察署長に電話をする。

「あつ、恐れ入ります碇屋のHGです。はい、いつも大変お世話になっております…はい…はい、いや要件はですね、Y国際港の貨物埠頭にあるN国の貿易商の倉庫事務所ですね、チヨイとドンパチやりまして（AMが「チヨイと…かい！」）…はい。…えつ、なんでかつて？実は自警団の仕事で港町の高級住宅地のある廃屋にホームレスがいると言う情報がありまして、立ち入ってみたら、外国人がたむろしてまして…捕まえて聞いたら、それがナシとN国人のマフィアだったので仰天！…どうやらN国マフィアのアジトに使われていた様です…えつ？…それは、もう港町署の人達に引き渡しました…4体（HGは〃したい〃とわざと発音して親父ギャグを言っています（笑））の死体と共に…えつ？『なんだ、それは？』って…いや、その廃屋の中に死体があったのですよ…それも真新しい4人もの…ええ…はいはい…えつ？『そんなの、どうやって捕まえたって？』ですって？それは、港町署の署長さんに聞いて下さいよ！既にウチのHYが話してますから…（HYが頷く）、それですね、話を戻しますけど…廃屋のN国マフィアが言うには、Y国際港の貨物埠頭にあるN国の貿易商の倉庫事務所に、N国マフィアのアジトがあつて、そこに廃屋の死体を撃った…いや、廃屋で死体を…ちがうな…まあともかく、死体を作った犯人が、こつちに居ると言うので…はい…はい…それは、こちらに来て捕まえた本人（N国マフィア）に聞いて下さいよ…こつちはまだ大変でしたので…なにせ…はい、いや、ウチの娘の一人が人質に取られてしまつて…はい、えつ？『誰だつて？』TYですよ…TY！…もう可哀想に…頭に銃口突き付けられて…泣いちゃって（TYが「泣いてません！催涙ガスのせいです！！」）…えつ？『どうやって奪還したか？』ですか？…はい、思わず撃っちゃいました（一同「「思わずか

い！！」…えっ？『発砲許可申請はどうした？』かですかあ？…それは、港町署とも協議したのですが、ホームレスだと思つて捕まえたら、N国マフィアだったので、〃発砲許可申請〃は、港町署持ちにしてくれました（大嘘です。作者注。HYが「わたしそんなこと言つてません！」と言つて、首を横に振る）…なので、こっちもそうならないですかねえ…（一同「「えげつなっ！！」」はい…はい、どうぞ港町署と協議していただいて結構です…ダメならこちらで作成しますので…はい…はいはい…はい、あつ、TYとHYを残していきま

すので、一応話をさせます…はい、では…」

HGは通話を終わると、フウツとため息をついた。

「准尉、お見事です！（えげつないですが…）」

AMがHGをねぎらう。

配置場所からライフルを抱えて、HG達の元に駆け寄ってきたIYに

「IY、よくやった！ナイスだ」

「はい」

「IY…ありがとね」

と言うTYにIYはニッコリと頷く。

「じゃ、引き上げる。HY、TY後ヨロシク！」

「はー」

●取引ナシよ！

その晩、Y国際港の貨物埠頭の違法薬物の取引時間になつても、一向にC国、N国両方のマフィアが取引現場に現れない。

「おい、RS！本当にこの場所で間違いないのだな！」

RSの上司のC国国家調査局皇国支部長が不安げに言う。

「まっ、間違いないはずです。C国マフィアのアジトのPCから得た情報ですので…」

と言いながらも、RSは（まさか…ガセネタつかまされた…？）と内心焦っていた。

そうこうしている内に、車のエンジン音が聞こえてきた。

「来たぞ！」

車が取引現場に到着し、いよいよ取引が始まるものと倉庫の陰にそれぞれ隠れて身構えていた局員達。

車から降りてくる人物を見て、皆驚いた…中でも一番驚いたのはRS…

「…おとーさん！」

RRは周囲を見回して、

「同胞諸君！ここで取引は行われない…取引に使われる違法薬物はここにある。なので、出てきたまえ」

と言って、RRの部下が車のトランクからジュラルミンのケースを2個降ろした。

「RR同胞！」

と言って、RSの上司が倉庫の陰から出る。RSもそれ従う。

「やあ、国家調査局皇国支部長同胞」

と言って、RRは気さくに手を挙げた。

「皆、味方のRR同胞だ！出てきていいぞ…でも、これは一体？」

RRの元に歩み寄るC国国家調査局皇国支部長とRS…その後ろに続々と局員が集まってくる。

「なあに…俺の親友がN国マフィアの事務所を壊滅しちまったのと、俺らが、反政府組織が

成りすましたマフィアを壊滅させた。取引に使われる違法薬物は全部回収して持ってきた。すぐに持ち帰り、同胞諸君の手柄にしてくれ給え」

「分かりました…ありがとうございますRR同胞」

と言って、RRの足元のジュラルミンケースの中身を確認して。

「よし、全員引き上げだ…」

と言って、手を挙げた。

「「はい」」

「…RS同胞」

引き上げる前に、C国家調査局皇国支部長はRSに対して振り返ると、

「はい」

「お前は、RR同胞と一緒に家に帰りなさい…処分は追って連絡する」

と言った。

「はい…」

RSはバツが悪そうに返事をした。

RSとRR達を残して、C国家調査局員達を乗せた車が次々と引き上げて行つた。それを見送ると、

「じゃ、S…家に帰ろう…」

と言って残されたRSの肩にRRは手を置くと、

「おとーさん、知ってたのワタシの事？」

RSが驚いてRRを見る。

「当たり前！本国の国家調査局本部から、お前が皇国の支部配属になった事について既に連絡を受けていた」

「ひどく！損した！！」

R Sが膨れて抗議すると、

「はは…帰ろう、おかーさんのご飯が待ってるぞ！」

と言って、R RはR Sの肩をポンポンと叩く。

「…子供扱いしないで、おとーさん」

● I S来店

数日後、I Sが白山亭に来店した。

「いらつしやいませ」

K Jをいつもの様に塩対応しているI Yが応対する。

「どうも…H G社長はいらつしやいますかな？」

「はい、今は店に居ませんので呼んできます。それまでこちらにどうぞ」

と言って、I YはI Sをバーカウンター席に案内する。バーカウンターに入っているT Tが
応対する。

「いらつしやいませ、じきオーナーのH Gが参りますので、ご注文を」

といつものように言って、メニューを差し出す。

「僕はいつもの白山亭オリジナルコーヒーを」

「畏まりました」

やがてH Gが身なりを正して店に入ってくる。I Sがご機嫌でカウンター席で手を上げ

てH Gを招き、H Gは（来たか…）と思いつつ、H Gがバーカウンター内に入ると開口一番

「いやあ…H G社長。毎度ながら全くお見事な腕前で…」

「はて…何のことでしょう？」

「またまたーご謙遜を…C国マフィアとN国マフィアの違法薬物取引阻止の事ですよ。お

かげで我が国のメンツが保てました」

と言う I S に対し（あんたなんか貢献したか？ I S）H G は I S のにやけ顔を見て呆れた。

「そういえば…一つ不思議な事がありましたね」

I S の真面目な顔をして、H G に言った。

「なんですか？」

「事件のあと、C 国マフィアのアジトを搜索したら、連中の金庫から金が全部無くなっていくんですよ？」

「そうですか…そんな事が（K K 団、やりやがったな！…あれ？『丘の上の雲』っヒント…まさか…）」

「なにか、ご存じない？」

H G を試すように顔を覗き込む I S に、

「さあ…」

H G は白々しく答えた。

「そういう事にしますか」

I S がにやけ顔に戻って言うと、

「そういう事にしておいてください」

H G と I S は笑った。

● K K 団の正体

H G は R 交易商公社の事務所に赴く。事務所のドアを開けると、

「よっ、H G 待ってたよ！」

と、R R がご機嫌で迎えた。

「俺がここに何しに来たのかを知ってるな！」

H Gが興奮して言い放つと

「おかげで、喫茶部を売店付で表通りに出店ができるよ」

「…やっぱり…K K団の棟梁ってお前か…R R！」

「ようやくたどり着いたね。もっと早く気付くと思ったよ」

「ったく、運河の入り口の木戸…あそこから母屋に忍び込んだな」

「俺が子供の頃、白山亭の女給のおねーさん達目当てに作った抜け道だ…子供の頃教えてやっただろ！まだ直してなかったのに逆に俺が驚いた」

「さっき、思い出した！帰ったら、鉄条網でも施設してやる！！」

「はは…そうだね」

「結局、お前の策略にまんまと乗せられたか…策士め！」

「でも、お前がN国マフィアを潰してくれなかったら、こっちが今後の商売で大損する。それから2回目の時にお前拳銃にライト付けてたろ…あれは正直ビビった…」

「フン！向けたのが愛銃じゃなくて悪かったな！で、少しは、分け前あってもいいのでは？」

「やらん！」

「けち…」

「あまったお金で今度は、白山亭の女給さん引き抜こうかな」

「娘どもはやらんぞ(笑)」

「ちえ！ケチ(笑)」

「で、青虎舎の方は？」

「緑龍城の残党とウチで処理した」

「そうか…」

「ところで、なんで“K K団”なんて回りくどい名前乗ってんだよ！」

「俺のイニシャル〃RR〃の上の横棒取ってごらん…」

「あゝ、やつぱり！」

「だから、言ったら！〃丘の上の雲〃って…上の棒は雲の様に流れるのさ」

「それと、N国マフィアに取られた青虎舎のアジトを引っかけたな…策士め！」

「アツハハハ」

●RS 謹慎

「いらっしやいませ…RRさん」

白山亭のフロアにRRが娘のRSと共に来店した。

「やあ、HG」

「やあ、RRいらっしやい…それからSちゃんも」

RRとRSはHGが居るバーカウンターの席に座る。

「ご注文は？」

「白山亭オリジナルコーヒーを2つ」

「畏まりました」

「コーヒーの品質と味の抜き打ちテストだ！」

「いやらしいねえ…ははは」

と言って、HGとRRは笑い合う。

「ところで、Sちゃんがいると言う事は？」

「HGおじさん、あのね、ワタシの正体、おとーさんとつくに知ってたって…」

「そーなんだ（やはりね）」

「それで、取引現場に誰も来ないのと、HGおじさんとおとーさん達が勝手に組織潰しちやつたんで、国家調査局から謹慎命令が出ちゃって…」

とRSは膨れて言う。

「なので、謹慎期間中にこいつ（RS）を白山亭でこき使ってくれて構わんぞ！ウチの喫茶部のウェイトレス修行も兼ねてね」

「いいぞ」

とHGが言うと、

「その前に！」

と、RSが言って、続けて

「あの画像消してよ」

と言った。RRは何のことか分からずに、

「なんだ、その画像って？」

とRSに訊ねると、HGが

「Sちゃんがこの店で熱心に仕事をしている所」

と言って、RRにスマートフォンを見せた。それを見たRRが驚くと、RSが素早くHGのスマートフォンを奪い取り、すぐさま画像を消してしまった。

「おやおや、折角の可愛い姿を」

と言って、RRが言うと、

「あんな、不細工な画像いらない！」

と言って、奪い取ったHGのスマートフォンを返した。

「ハハ、画像はこれだけじゃないぞ！クラウド上にあるから、後でLさんと共有しよつと」

とHGがシレつと言うと、RSは

「えげつないわね！」

と言って、膨れた。

RSは謹慎期間中白山亭の女給服姿で働いた。

…で、H G達のドンパチに対する“発砲許可申請”の行方はどうなったか？ですか…それは、港町警察署と港町水上警察署の署長同士が話し合い、N国マフィアの壊滅と逮捕に免じてそれぞれの署が許可したと言う事になりました…めでたし、めでたし(笑作者)

●エピソード、H G、T Kをエスコートする

事件が一件落着いたので、H GはT Kとの約束を守るべく、T Kにその旨を電話した。T Kの次の休暇が白山亭の休業日と重なったが、H Gは、それはそれでY国際港を案内できると考え、T KとY国際港駅前で待ち合わせることにした。その情報がどこから漏れたか不明であるが、T T達の耳に入り、当日、事件に巻き込んだT Kを改めて観光案内するH Gの二人を尾行してゾロゾロついて行く娘・息子共とT T、おまけにA M目当て(笑)のM Z…「以前来られた時に話した様に、この港は古くから世界に開けた所ですので、こういう素敵なお店もあるのですよ」

とH GはT Kを案内し、つい最近表通りに出店した“茶癒庵”と言う店に入る。

「どうです？」

「素敵ですね…Kお嬢様にお土産を買っていきましょう」

T Kは店内を見回して喜んでいた。

「あと、こちらではC国のお茶とお菓子が楽しめます。入りますか？」

「はい」

二人は売店に併設している茶店に入る。

店内でC国茶とお菓子を楽しんでいる二人を見ながら…店の外では

T T「うーん、悔しい！私もあんな風にデートして欲しい！」

H Y「T T判るけど、あなた結婚してるでしょ！」

I Y 「どうか…これ以上、私の黒歴史がバレませんように…」

H Y 「あなた、まだなんか隠してるの？」

I Y 「いえ…姉さん程では…」

H Y 「なんでよ！わたしは、もう洗いざらい親父とあなた、それにT Tに話したわよ！」

T T 「H Y、あなたは、どう思うの？あの二人を見て」

H Y 「わたしは別に…」

I Y 「姉さん我慢しなくていいですよ」

H Y 「こんなの一時的な事だし…親父が風邪をひいたと思えば…いずれ私の元に戻ってくるから」

「「ええっ！」」

T T 「…凄い自信ね！」

T Y 「わたしは、I Aから親父に新しい恋人ができたって聞いたけど…そうよね？I A」

I A 「はいな姐さん」

M P 「オヤジ、モテモテネ」

A M 「自分は新しい夫婦漫才コンビ(笑)が結成されたと聞きましたが」

M Z 「あんっ！A M様、こんなのほっというて、私達もデートしましょう」

R S 「あんた達暇だね」

と言うR Sの言葉に全員振り向く

「「なんであんた(R S)がここに居るの？」」

「だって、この店ワタシの実家の店だもの」

「「エーっ！」」